
ニヤ ~ ゴ ~ Dreamlike stories ~

yama3wakasama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニヤ〜ゴ〜Dreamlike stories

【Nコード】

N2897N

【作者名】

yamawakasama

【あらすじ】

勉強、スポーツ、ともに普通。

人気者でもないし、少し中二病だが、変人というわけでもない。人に自慢できるところといえば、走るのが得意というぐらい。

変わっているところといえば、名前が日月火水たちもりひすいという事だけだ。僕はそんな普通の高校2年生だ。

でも、この普通の世の中で普通じゃない人などいるのだろうか？

普通。決して悪くはない、でも、よくもない。

僕はそれが嫌いじゃない。むしろ好きだ。かわらない毎日。

学校へ行き、勉強して、友達としゃべって、部活して、くたくたになつて家に帰り、寝る。

普通に恋して、将来を夢みて、希望を持つ。

それだけだ。それだけでも、楽しい。友達といると楽しいと思う。

みんなの笑顔を見るのが好きだ。笑わせるのが好きで、いつもバカなことばかりやっていた。

でも、魔法なんかが使えたら、なんて時々思ってしまう。

いつからだろう、そんなバカなことを思ってしまったのは。

第一章 プロローグ（前書き）

初めて載せる小説なので、すごいドキドキしています。

読んでいて楽しい物語になるように作ったので、楽しんでもらえる
と嬉しいです。

良ければ見て行ってください。

第一章 プロローグ

なんで、俺を理解してくれないんだ!!

こんなに努力しているのに。

こんなに悩んでいるのに。

ただ、認めてもらいたいだけなのに。

ツライ。

俺は天才だ!! 天才なんだ!! でも、この世界で評価されるのは、ただ単に強い奴だけ。

バカのくせに。

僕は弱くなんかない。僕は天才なんだ。

変えてやる!!

俺が変わっても意味がなかった。

だから変えてやる!!

この世界を。俺を追い込んだ君たちを。

俺が認められるような理想の世界、そんな世界に変えてやる!!

抵抗するやつらは抵抗できなくしてやろう。

抵抗できない形に変えるんだ。想像しろ。『創造』しろ。

かわいくしてやろう。皆かわいくしてやろう。

俺ならそれができる。なぜなら俺は天才だからだ。

悪いのは君たちだ。俺を『いじめた』君たちが悪いんだ。

悪い奴らはいらぬ。

神は悪い奴らを地獄に落とすと言った。でも、それじゃあダメだ。

地獄からよじ登ってくるかもしれない。

いなくなればいいんだけど、それは俺には無理だ。

だから、悪い奴らは俺が可愛く変えてやる。『創造』してやる。

俺が創造主になってやるんだ。

そしたらすべてがうまくいく

『創造』しろ!!

第一章 プロローグ（後書き）

まだまだ初めです。

これから、楽しくしていこうと思います。

どんどんあげていきますので、

勉強したいので、

感想をよろしく願います。

01 猫モーニング (前書き)

えっと……続きです。

ここからは、楽しく書いていこうと思っているので、よければみなさん見て行ってください。

ある程度絵も描けるので、

気が向けば、絵も載せていきたいな〜なんて思っています。

01 猫モーニング

「……」

僕は空を飛んでいた。空高くからこの大地を見下ろし、自由に、ゆつくりと飛び回っていた。

青い空の中を自由に飛び回る。

「きもちいい」

風が優しく包み込むように、僕の体をなでていく。

「やっぱり、空はきれいだなあ」

自由に、自由に飛び回っていた。

右手を動かせば風が吹き、左手を動かせば雨が降った。すべては僕の意のままに動く。

「にゃ〜」

突然、僕の前に一匹のネコが現れた。黒いネコだ。なんだろう？ネコは必死に鳴いていた。何かを言おうとしているように見えた。

「……」

「??？」

よくきこえない。もう一度言っつて。

「……」

「……」

やっぱり聞こえない。何でだろう。自由に動けるのに、ネコには全然近づかない。

それに、耳が痛い。なんだろう、だんだん意識が遠のいていく……

「……ガブッ」

目が覚めると、僕は耳をかまれていた。

突然現れたネコ耳を付けた天使が優しく耳を甘噛みしてくれた

わけではなく、もうこの家で生まれてから5年がたとうとしている、うちのネコにだ。

「ツツ!?!い、いてえエエ~~~~!!おい、シロ」

生まれたばかりの頃は甘噛み程度で済んだが、生後2年となると普通に痛い。

ちなみに、シロというのはうちの猫の名前だ。色が白いからシロ。単純な理由だ。

「おい!!耳噛むなって言ってるんだろ、シロ!!」

「にゃ~~~~ん」

「てめえ、言いたいことがあるんなら言ってみよ!!」

「にゃ~~~~、にゃ~~~~」

当然、ネコが話せるわけがない。高校生にもなれば、それくらい理解している。でも、こんなことを言うのにはちゃんとした理由がある。最近発売された首輪型のネコの言葉を日本語に直して話してくれる『ネコネコ話せる君』という胡散臭い商品を先月買ってしまったのだ。そしてつけてみると 見事だまされた。時々、可愛らしい女の人の声で「おなか減った」「気持ちいい」とか、言うぐらいだ。まあ、考えてみれば、ネコがそんなにものを考えてるわけがないことぐらいわかるはずなのに。(いや、最初からわかってたんだけど、ついノリで……)

それに、この首輪、無駄に大きい。大きさ調節が50段階できる。(どれだけでかいネコがいると思ってるんだ??)

猫だけじゃない。これだけ大きければ、サイだって、象だってつけられるんじゃないか??

しかし、この商品、なぜか結構売れているらしい。謎の売れ行きだ。まったく意味が分からん。

期待しているわけではないが、一応スイッチを入れてみる。

「何かしゃべれよ」

「お腹減ったにゃ~~~~」

やっぱりこれだ……。これでなぜ訴えられない???どこのクレ-

マーが今頃頑張っているのだろうか。

「はあ〜、結構高かったんだぞ、それ」

「お腹減ったにや〜」

「もつとほかのことを言ってみるよ。ってか、語尾につける『にや〜』ってというのがなんか腹立つんだよな」

これで、姿が人型なら完全に萌えキャラなのだが、こいつはただのネコだ。ネコにはさすがに萌えないよな。

「お腹減ったにや〜。お腹減ったにや〜」

「おなかが減ったなら、妹にもらえばいいだろ」

こいつ、なぜかいつも僕のところに来る。新手の嫌がらせか！

「お腹減ったにや〜。お腹減ったにや〜。お腹減ったにや〜」

「わかったよ黙れよ！〜！つたく、たまには自分の部屋で寝ろよ」

僕の家は普通ではなくて、家にネコのための部屋がある。犬小屋みたいな感じではなくて、普通の部屋。しかも、僕の部屋より大きい。起き上がるうとすると冬の乾燥した、冷たい空気に包まれた。

（寒い……布団に包まりたい。）

そんな欲求が僕を支配する。冬は毎日こんな欲求との戦いだ。いつそのこと、ミノムシみたいに布団を常備したいとさえ思う。まあ思うだけで、しないし、それで外に出る勇氣はない。

「お腹減ったにや〜！〜」

「わかってるよ！〜！〜」

少しイライラしながら、僕はリビングに向かった。

（今日は〜金曜日か……学校いかないとな）

「あ〜〜さむ〜〜」

今は11月の終わり。冬である。寒くないわけがない。そしてこれからもつと寒くなる。

「おはようお兄ちゃん。また、シロと遊んでたの？いいな〜〜」

妹の日月木金はすでに起きていた。（完全に僕たち兄妹は名前きょうだいで遊たちもりきがね）

ばれている。と、少なくとも僕はそう思っている)

中学1年生で、いつも髪をツインテールにしている。身長は145
?ぐらいで体重は……黙っておこう。

ちなみに、僕は何へアーというものはない。適当だ。言うならば、
無造作へアーというやつか??まあ、自分なりにこだわりがあるん
だけど、誰もわかってくれない。

「遊んでねえよ。こんなの、お前に変わってくれって感じた」

「え〜、なんで〜??わたし変わってほしい〜。なんでお兄
ちゃんのとこばかり行くの??」

「しらねえよ。シロに来てくれって言えばいいじゃねえか。」

世の中そううまくはいかない。まあ、高校生風情が世の中を語るに
はまだ早すぎるが、まったくもって理不尽だ。

(なぜおれのところにくるんだシロ!!妹の言うことをきいてやれ
よ!!)

「ねえシロ〜。明日はわたしのところに来てよ〜」

「お腹減ったにや〜」

「ねえねえ〜。ごはんあげるから〜」

「お腹減ったにや〜」

木金きがねとシロがそんな会話を何度も続けていた。よくも飽きずに毎日
話しかけられるな。少しイライラする。

「お前、遅刻するぞ」

「え〜、だってシロが〜」

「お腹減ったにや〜」

シロがそういつた瞬間、僕の中のリミッターが外れかけたが、何と
かおさえた。

「……おい……、もうシロにつけてる機械の電源切っていいか?」

「え〜、かわいいのに〜。」

どこがだよ!!と、思いながら僕は電源を切った。

(悪いな、木金きがね。このままにしておく、僕の怒りはお前に向かい
そうだったんだ。)

「にゃ〜」

そして、家族に平和が戻った。

親は二人ともいつも朝早くに仕事に出てしまう。帰ってくるのも遅い。必然的に、家にいるときはほとんど妹と二人つきりだ。それでも、結構楽しく暮らしている。

（べ、別に、僕は妹と二人でいることを喜ぶような変態ではないぞ。確かに妹はかわいい。色白でたれ目で小さくて、年の割には胸があつて、「お兄ちゃん」と、言つて、いまだにくつついてくる。正直かなりうれしい。

だが、そういう感情は持つていない……はず。ただ、仲がいいだけだ。そういうことにしておいてほしい。）

「学校行くのめんどくさいな。瞬間移動テレポートが使えたらいいのに」

「またそんなこと言つて〜。お兄ちゃんは現実を見なさい」

「はあ〜い」

そついいながら、僕は靴を履いた。

（ホントに、瞬間移動テレポートか空が飛べたらいいのにな〜。つて、空？ なにか忘れてるような気が……、まあいつか。）

「じゃあ、僕は学校へ行くから。ちゃんと家のカギを閉めてから学校へいくんだぞ」

「わかつてるよ〜。私だつてもう子供じゃないんだから〜」

玄関まで見送りに来た妹は、ぷりぷりと怒っている。

僕にとつてはまだまだ子供だ。というよりも、いつまでも子供のままでいてほしい！！

「そつだな〜。木金きかねはもう大きいもんな〜」

「うう〜。大人だもん。胸だつて大きいもん。そのうちに、お兄ちゃんなんて簡単に惚れさせちゃうんだから」

（まつたく、かわいいやつだ。）

「そつか、楽しみにしてるよ。じゃあ、行つてきます」

そついつて、妹との楽しい会話を惜しみながらドアを開ける。外は雲一つない青空が広がっている。

「ちょっと待って、お兄ちゃん。今日雨降るから、傘持って行つてね」

「ん？今は雲ひとつないみたいだけど……まあ木金きがねが言っんなら間違いないな」

昔から、こいつの天気予報は外れた事がない。

「全くどんな魔法を使つてんだ??」

「魔法なんて使えないよ〜」

少し大きめの傘を取り、僕は家を出た。

「いつてらっしや〜い」

「いつてきます」

後ろで、妹がずっと手を振っている。いつまでこんなこととしてくれるんだろうなあと、時々寂しくなる。

寒く乾いた空気の中を僕は学校へと歩き出した。

01 猫モーニング（後書き）

ホントはもっと妹との会話をさせたかったのですが、

怒られるのは嫌なので、やめておきます。

書き方として、行と行の間をあけた方がいいんですかね??

感想など、待ってま〜〜す。

02 学校フイーバー

「はあ、はあ」

(やばいやばい)

忘れ物をしてしまったせいで、ギリギリになってしまった。

いや、忘れ物だけならいいが、家について、もう一度妹との会話を楽しんでしまったせいだ。

妹は学校が近いからいいが、僕は学校まで30分ほどかかる。

いつもこんな感じで学校につくのは遅刻寸前になってしまう。

(まったく、ダメなお兄ちゃんだ)

何とか学校に間に合った。

「セーフ！」

勢いよく教室に飛び込んだ。その時、誰かにぶつかった。

「いたっ!!」

女の子だった。僕とぶつかった女の子は後ろへと倒れ、尻餅をついた形になる。

「ご、ごめん!! だいじょう……」

高校生で女の子ということはスカートをはいているわけで……

今のは事故だったが、思春期の男の子ならばこんなことがあれば誰でも見てしまうだろう。

「……」

それに気付いたのが、目の前の女の子は慌てて手でスカートをおさえる。

顔が赤い。女の子の顔から火が出そうだ。よく見ると、その子は野の中麻衣なかまいだった。

(や、やばい)

黒くて長い髪は三つ編みにして束ねていて、メガネをかけていて、スカートは一切おらずに長く、真面目な委員長だ。

スタイルが良くて、胸もそこそこあり、おとなしそうに見えるのだ

が、これがまたきつい性格で、いつもツンツンして、校則を破るやつは許さないってタイプの人間だ。

特に僕はしょっちゅう怒られている。

「日月……。またやったわね……。」

「やっぱりきた。もう逃げられない。」

「わ、わるい、麻衣。スカートの中は見てない……から」

「見たのね。私の……。」

「……いや、あの、わざとじゃなくて、たまたま見えちゃったっていうか……。」

怒っている。今にも飛び掛かってきそうなライオンのような気迫でこちらを睨んでいる。

「だいたい、こんなギリギリに来るから走らないといけないのよ。」

「バカ!!」

「それには色々深い事情があつて……。」

「妹とお喋りするのが深い事情なのかしら。このシスコン!!」

寸鉄殺人だ。僕は一瞬にして灰へと変わった。

「何でそれを知ってるんだよ」

半泣き状態で尋ねる。

「えっ、た、たまたま、あなた達を見ただけよ」

わなわなと震えだす麻衣を見て、不審に思う。

「たまたまって、お前の家ウチの方向と違うじゃねえか。それに声かけてくれれば良かったのに」

「そ、それは……そっちの方に用事があつて……う、うるさいわね。何でこんなこと言わなきゃならないのよ!!」

右の頬にいいパンチがとんできた。そして、殴られた。

麻衣はプイと横を向いてどこかへ行ってしまった。散々だ。いや、まあ見たのだけでも……

(性格がこんなのでなければ可愛いのかなあ)
そう思いながら再び教室へ入ろうとする。

教室へ入る。すると、後ろから忍び寄る影が……

「よゝ、たちもり〜。寂しかったよ〜」

「なっ!?!」

言い終わらないうちに、僕は抱きつかれた。相手の体の感触。『ふんわり』なんていうもんじゃない。

……筋肉質でがちがちだ。これが、かわいらしい美少女ならまだよかったのだが、残念ながらこいつは男だ。しかもマッチョで角刈り。

「うふふ。お前に会いたくて会いたくて、夜は眠れなかったよ〜」

「トモ、お前夜以外はずっと寝てるだろ。それに、昨日もあつてるだろ。そして、気持ち悪い離れる」

僕は必死に引き離そうとする。が、なかなか離れない。こいつなかなか馬鹿力だ。なにか格闘技を習っているらしいが、よく知らない。知りたくもない。

「無理だよ、た〜ちもり〜。俺は毎日ランニングや筋トレなどのトレーニングをやっている上、愛の力まで入っているからそんな弱い力じゃ離れないよ〜」

「いつ俺とお前の間に愛の力が生まれたんだ、この変態!！」

「どうしてそんなことをいうの??」

「暑い、うざい、きもちわるいの三つがそろってるからな」

「そ、そんなあ。そんなこと言うなんてひどいよ。智樹ちじゅ悲しい。ぐすん」

「一生泣いてる。つたく」

まったく、騒がしい奴だ。こいつ、草薙智樹くさなぎとむきは幼稚園のころから一緒で、いつもくっついてきやがる。いわゆるホモだ。一（本人は否定している）そのくせ、顔がよくて女子からモテモテなところがよけい僕を腹立たせる。この世に神がいるとしたら、これは何かの間違いだろ。そう願いたい。

「ピッピ〜」

目の前の女の子がホイッスルを鳴らした。

「いつも仲がいいね。二人とも」

そこには、音無奏おとなしかなでがたっていた。少し栗色が入った髪は綺麗な肩までかかるセミロングで、さらさらと揺れてとてもきれいだ。優しそうで、大きすぎず小さすぎない程度にふっくらとした胸、整った顔立ち。まさしく、美少女って感じだ。かわいい。見た目だけじゃないぞ。性格もかわいいんだ。でも、なぜかわからないが、いつもホィッスルを持ち歩いている。部活のためか？

「か、奏かなで！いや、そういうわけじゃ……」

「ふふ、そうなんだよ。だって、俺たち愛し合ってるから……ね」
僕の言葉をさえぎるように、智樹は黒く焼けた顔を赤くして、恥ずかしそうに言った。

(きもちわるい！！何が嬉しくて僕がこんなことをされてるんだ？)
「おい、トモ！ち、ちがうよ、奏。僕はこんな気持ち悪い奴とはいたくないんだ」

僕はトモの手を振りほどきながら言った。

「言われなくてもわかってるよ。本当にそんな趣味があるんだったら、私、日月君たちもりと友達になってないよ」

「あはは……そうだね」

奏から、少し黒い何かが見えたが、幻覚だろう。

(最近目の調子がおかしいのかな？あはは……)

「すると、俺は友達じゃないのか？」

と、トモは言った。

「じゃあ、日月君たちもり、私ちよっといかないといけないから」

「あれ、俺、無視されてる??いじめか?いじめなのか??なあ、たちもり??」

トモは震えるチワワのような目で僕を見る。目がキラキラしている。似合わないしすごく気持ち悪い。

(俺に振ってきやがった。ここはスルーだ!!)

「うん。わかった。じゃあね、奏。またあとで」

「こっちもかよ。なんだよ、たちもり??」

無視だ無視！！相手にしなければいいんだ。あっち行ってる。そう思っていると、体にトモの腕がからみついてきた。

「お、お前。暑苦しい。マジ離れろって」

離れない。離そうとするほどきつくからみついてくる。

周囲の女子からの目が痛い。その中の半数は、「日月君たちまじつらやましい」とか、思ってるんだろつなあ。こんなことされても、僕はうれしくないよ。

トモは、女子から見れば、ただかっこいいのではなく、『キモカッコイイ』のだそうだ。まったく女子の好みはわけがわからない。

よくわけのわからないストラップを見て、「かわいい〜」とか言っているのがあるが、そういうことなのか？？

そんなことより、この状況を何とかしなければ。

「どおう〜るるらあアア〜」

僕がそう叫んだ瞬間、僕の中の何かが目覚めて、周囲に風が舞い、嵐が生まれ、トモが吹き飛ばす……なんてこともなく、はなれなかった。

僕は右腕を握った。「くそお〜、この僕の右腕に眠る力が目覚めれば一発なのに〜」と思っただけではない。

トモの顔を殴ろうとしているんだ。でも、どんなに暴れても、攻撃できない。

（ほんとにこいつ力強え〜）

「しかたがないなあ〜」

そう言っつて、やっと僕は解放された。どつと疲れがたまった。

僕が距離を取ってトモの様子を窺っていると、先生がクラスに入ってきた。

「おい、みんな席につけよ」

どうやら、僕の戦いは終わったらしい。戦いで言っつなら、今回は負けだ。いや、今までに勝ったことがない。だからと言って、再戦をして勝つてやるとも思わない。というより、こんなこと二度としない。

僕は逃げるように窓側の一番後ろの自分の席へ座る。トモも残念そうな顔をしながらトボトボと反対側の廊下側の一番後ろの席へと座る。

そして、朝のHRホームルームが始まった。

03 昼ブレイク

くだらだと先生の話を左の耳から右の耳へ受け流し、何のために受けているかわからない授業がいったん終わった。

今は、昼休みだ。

昼休みだからと言って騒ぐのは小学校低学年までで、今となってはただ昼ご飯を食べる時間にすぎない。

高校生になっても、昼食の時は皆、友達と机を合わせて数人で食べる。

特に女子は10人くらいのグループで集まって食べている。

男子はというとバラバラだ。中には一人で食べている奴もいるが、それは少し変わったやつだ。

僕はというと、一人で食べるのはなんとなく浮いて見えるから、いつもトモと二人で食べている。

トモは気持ち悪いが、悪い奴ではない。

食べている最中には何もしてこないし、いつも世間話をしている。ま

あ、話をするのは基本トモなんだが。

「なあ日月、お前朝は散々な目にあつたな」

(散々な目の半分以上はお前なんだけどな。)

「それって、麻衣の事か？それともお前の事か？」

「俺の事？？いつ俺の事で散々な目にあつたんだ？？」

トモはとぼけているといった様子もなく、真面目にそう聞いた。

(そうだった。こいつは全く自覚していないんだった。)

自覚がないだけよけい厄介だ。いつか何とかせねば……

「委員長の事だよ。委員長の野中麻衣。お前って、何かと野中にか
らまれるよな」

「そうか??みんな麻衣に説教されてると思うけどな」

「それはそうだけど。お前は毎日の中に絡まれてるじゃねえか。こ
んなやつほかにいねえぞ？」

確かによく怒られる。この前なんか外で偶然会って怒られた。

それは僕がいつもだらしなくて、遅刻ギリギリに学校に来るからなわけで、何か特別な理由があるわけではない。

「お前ら、怪しいんじゃないか？日月、野中の事、麻衣って呼んでるしな。おい、どうなんだよ。」

トモがふざけた調子で聞いてくる。しかし顔を見ると、眉間にしわが寄っていて……少し怖い。

「別に何ともないよ。それに奏のことだって下の名前で呼んでるし」

「確かにそうだな……。んっ???ということは、アレか!?野中と音無に二股ってやつか!？」

突然声を張りあげたトモは、必死に身を乗り出して聞いてきた。

「どうなんだ?日月!^{たちもり}野中とはどうなってんだ?どうなんだよ!」

(やめてくれ)。そんなに大きな声で言うと、聞こえちゃうじゃないか!)

「何の話をしてるのよ!!」

づかづかと大股で現れたのはもちろん委員長、野中麻衣だ。

(やつぱり来た。)

「野中には関係ない。大切な話をしているんだ。あっちに行つてくれないか?」

トモは口調が変わり、明らかにめんどくさそうな顔をして野中を見ている。

これほどにも鋭い目つきをしたトモを見たことがあつただろうか。

「関係ないって、今私の名前を言ってたじゃない」

「ふん、まったく自信過剰な女だ。他人がみんなお前の話をしてると思つたら大間違いだぞ」

トモが嫌味っぽく麻衣に言う。

(いや、完全に麻衣の話してたよね!!)

かなり息苦しい雰囲気だ。多分、この後二人の怒りの矛先は僕に来

るのだろう。今の間に逃げなければ。

「ちよつとぐぐ、どこへいくの？日月君。あなたも関係あるのよ？」

「おい、日月たちもり！まだ話は終わってないぞ！！」

ほら来た。理不尽だ。まったくもって理不尽だ。なぜ僕は二人に責められなくちゃならないんだ？

（ここは何か理由をつけて逃げるのが吉！！）

「あはは。ちよつと、頭が痛くなっちゃって、保健室に行こうかと思つて……」

……

無言だ。まるで、時間がとまったように動かない二人は無言で僕を見ている。静かだ。静かすぎて気味が悪い。

なんなのだろう。そんな言い訳通用するかと、言うことなのだろうか？

いや、でも、二人を見ても僕と目が合っていない。ということは、何かを考えているのか？

（これは……チャンスか？）

「じゃ、そういうことだから……」

僕は立ち上がり、勢いよく飛び出した。

否、飛び出そうとした。の間違いだ。体が一步も前に動かない。

それもそのはず、さっきまで止まっていた二人が動き出して、左右の手が二人に引つ張られているからだ。

「……。な、なにかな？」

肉食動物に狙われた草食動物のような気分で、二人を振り返った。

さっきと同じ顔で僕を見ている。

（食われる。僕は、この人たちに食われてしまう……）

その時、トモの口元が動き、ニヤリと笑った。

「大丈夫か？日月たちもり。頭が痛いのか。それはいけないな」

僕の肩に手を置いて、心配するように言った。

「それじゃあ、俺が、うへ。連れてって、あ・げ・る！！うへえへえへえへえ」

「何でにやけてんだよ!! 気持ち悪いよ!! 近づくなよ!!」

「そんな遠慮しなくてもいいんだぞ〜。うへへへ」

このまま一緒に行ってしまうえば、明らかに何かされることは確実だ。何とか阻止しなければ。

頭が痛いというのが嘘だとばらすか？

いやいや、そんなことをしてしまえばまたさっきのように二人に責められる……

(どうすればいいんだ!?)

「あなたうるさい!!」

「ぐはっ」

麻衣がトモを突き飛ばした。トモは机に頭を打ち付けたようで、倒れたまま動かない。

まあ頑丈なトモの事だ。命に別状はないだろう。

あつても記憶が少し飛んでるくらいだ。この際、記憶が飛んで別人のようになってくれれば非常にありがたい。

「た、日月たちもり 君。ホントに頭が痛いのか？」

や、やばい!! 麻衣に疑われている。

「ほ、本当だよ。昨日の夜あまり寝てなくて、それで、朝から頭痛がひどいんだ」

俯きながら頭が痛いアピールを続けた。どうだろう、うまくごまかせたのだろうか？

「えっ!!……そ、それなのに、私、朝、日月君たちもりを殴っちゃって……」

……
様子がおかしい。ふと、麻衣を見ると、瞼に涙をためて、今にも泣きだしそうな顔をしている。

「いや、その」

「ごめんなさい。日月君たちもり……。朝、私にぶつかっちゃったのも、頭が痛くてぼーっとしちやっただよね……。それなのに、それなのに私……」

(やってしまった!?!どこでどうミスったんだ?? 何とか慰めない

と。泣きそうな顔、結構かわいいな……）」

「別にいいよ、麻衣。僕はそんなこと気にしてないから。それに寝てないのもテレビを見すぎたせいだし」

「で、でも、頭痛いのに、殴っちゃって、それでもっとひどくなっちゃったんだよね……」

なんかすごい心配されてるような気がするのには気のせいなのか？

そして、麻衣は潤んだ目をこちらに向けて、もじもじしながら申し訳なさそうな顔をして俯いている。

さつき少し取り乱したせいか、メガネがずれている。俯きながら時々僕をちらつと確認するように視線だけを上げるようすが……。

か、かわいすぎる！！

そして、ついには涙を流してしまう。

（こんなかわいい子にこんな思いをさせるなんて……。このままでは、僕の罪悪感が……）」

「大丈夫だよ。もう痛くなくなったから。ありがとう、麻衣、心配してくれて」

俯いていた顔がふと上がり、まっすぐに僕の方を見ている。

「……」

麻衣の顔がかーっと赤く染まっていく。

「ち、違うわよ。心配したんじゃないじゃなくて、私のせいで授業に出られなかったら嫌だから……だから、心配してあげたのよ……！」

「心配したのか心配してないのかどっちなんだよ」

「う、うるさいわね。病気とか、怪我とかしないよね……」

怒っているのか、安心しているのかよくわからない顔を浮かべながら、ぼそぼそとつぶやいていた。

僕がにこにこしながら見ていると、くるっと後ろを向いて、どこかへ行ってしまった。

（うっくん。なんだったんだ??まあ、結構貴重な顔が見れてよかったな……）」

などと考えながら、下を見るとトモが倒れている。

）とりあえず、こいつを起こさないと。もうすぐ授業も始まるし。
トモを起こした後、慌てて残っていたお弁当を食べ、次の授業の準備を始めた。

04 放課後ピンチ（前書き）

感想、ありがとうございます。

なんか、うれしいですね。こうなの。

頑張ります。

後、魔法とかは出てきていませんが、この話は一応SFですWWW

04 放課後ピンチ

午後の授業が終わり、あつという間に放課後になった。外を見ると、少し薄暗い。雨が降りそうだ。

これからいつも通りに陸上部の部活へ向かう。運動部の部室は外に作られてある。

(部活、めんどくさいなあ)

そんなことを思いながら、教科書をカバンに入れる。別に部活が嫌いなわけじゃない。

でも、この冬の寒い時期に外に出て走るっていうのは正直いやだ。走っている時でも手や耳なんかはすごく寒い。

(室内でぬくぬくと部活をしている文化部がうらやましいぜ)

だが、悪いことばかりじゃない。走るのは嫌いじゃないし、それに

……。
「日月君、いっしょに行こ」
たちもり

部室へと歩いていると、奏が隣に来て言った。奏も僕と同じ、陸上部だ。

「うん。いっしょに行こう」

クールに装ってはいるが、このとき僕は発狂するぐらい嬉しかった。さっきの言葉もちゃんと言えたかどうか怪しいくらい嬉しかった。

世間話をしながら二人で部室に向かう。すごいことだ!!

そう。僕は、麻衣とのことを疑われたが、本当に好きなのは奏だ。

この学校に入って、初めてクラスで見たときから気になっていて、たまたま部活が一緒だった。

好きといっても、まだどれくらい本気なのかは自分でもわからない。でも、一緒にいるとすごくドキドキして、うれしかった。

僕はあまり積極的な方ではないが、今のところ仲がいい……と思う。まあ、同じ部活だからと言って、男女と一緒に部活いく時点でそれなりに仲がいいんだと思ってもいいんじゃないか？

「今日のお昼、楽しそうだったね」

「今日のお昼って……。あっ！！見てたの!？」

あの場を見られていたのかと思うと何とも恥ずかしい。

まあ、同じ教室であれだけ騒いでいれば見ていない方がおかしいくらいだ。

「うん。草薙君と野中さんと楽しそうにしてたから、何してるのかなあ〜って」

あれを見て楽しそうに見えたなんて……。そんな風に思うのは羨くらいだ。まあそこが可愛いだけでも。

「野中さん、顔真っ赤にして日月君のこと見てたけど 何を話してたの？」

あれ、なんか怖い……

いやいやいや、そんなはずはない。だって、奏、今もこんなに笑顔で話してるじゃないか。

「何って……頭が痛かったから保健室に行こうかなあ……とか？」
うん。そのはずだ。確かあの時はそれ以外何も話してはいないと思う。

「へえ〜。でも、なんで野中さん顔が真っ赤になってたんだろ〜？
おかしいな〜、保健室に行くだけなのに〜」

「……いや、それは……。まあ、いろいろあって……」
やっぱり怖い。それより、奏が変な誤解をしていなければいいんだけど……

「うふふ。野中さん、日月君の事、好きなのかなあ〜」

「なっ、いきなり何を言い出すんだ!？」

「だって、日月君の事心配してたみたいだし、よく日月くんに話しかけに行くし。日月君はどうなの？」

さっきよりもいっそう楽しそうな満面の笑みを浮かべていた。

（そんな笑顔を浮かべないでくれ！！僕が好きなのは、か、奏なのに！！）

「な、なにをいきなり!？麻衣は僕の事なんて心配してないと思う

よ。そ、それに、僕は麻衣の事何とも思っていないし……」
多分、焦りすぎて何を言っているかわからなかったと思う。

（か、奏は何を言ってるんだ？？しかも、何でここで笑顔なんだ？
？奏は何とも思っていないのか？？）

僕の頭はオーバーヒートを起こしそうなほどフル稼働して思考を巡らせていた　　が、まったく意図が読めない。

「うふふふ、そうなの？？」

なんで、奏がそんなに笑っているのか全く分からない。

だが、ただ一つ言えることは、こんな状態でも奏の笑顔は素敵だった。まるで、奏の周りにだけ花が咲いているようだった。

この笑顔を見ていると、なんだかどうでもよくなってしまうようだ。
（……）

今、奏から黒いものが見えた気が……。それに、今、すごい寒気を感じたような……

「それじゃあ、日月君は何とも思っていない相手に、『ありがとう、麻衣、心配してくれて』なんて言ったんだね。やさしいね、日月君」

いつもと同じような声で言っていたが、少し、違和感を感じた。なんだらう、語尾に力が入っていたような……

それにおかしい。顔と言葉だけを聞くと、すごく褒められているはずんだけど、全然うれしくない。

何か、追い詰められた気分だ。

「じ、ごめん」

「え、なんで日月君が謝るの……？？」

「あ……じ、ごめん」

何も悪いことをしていないはずなのに、なぜか謝ってしまう。

（あれ？僕、ホントに何も悪いことしてないよね？？でも……何でだろう。奏の顔が直視できない……）

「日月君はおかしいなあ。うふふふ」

「あははは、おかしいね……」

僕の心にはすごく悪いことをしてしまったという罪悪感が残った。

(この話はマズイ!! 違う話に変えなければ……)

「え、えつと……」

「それじゃあ、日月君は誰が好きなの??」

奏は僕が話したそうとするのをさえぎり、立ち止まって言った。

その表情は、いたずらっぽく笑っていた。

「!」

話が変われない!! こんなこと言えるはずがない。だって、まだ全然お互いのこと知らないし……

(どうすればいいんだ??)

ドドドドドドド!!!!

この地響きは あいつが……

「せんぶあ~~~~い」

その声と地響きと共に現れた少女によって、さっきまでの張りつめた空間が一瞬にして砕け散った。

いや、少女ではない。年齢的には少女だが、でかすぎる。

身長178cmという長身で、一見、美少年のような顔立ちで、髪型もショートヘア。アスリートのように手足が長く、いかにもスポーツができそうな見た目の女の子、早乙女奈緒美ひおとめなのみ、こいつも陸上部だ。

その見た目のせいで、女子からばかりモテているらしい。なんて羨ましい。

「な、なおみゆはっつ」

その少女はものすごいスピードで走ってきて、僕とぶつかった……はずだ。

いや、確かにぶつかった。人と人がぶつかると、二人ともその衝撃でこけるか、それなりにぐらついたりする。

だが、今はなぜか僕だけ宙に舞っていた。たとえとかではなく、人に撥ねられたのだ。まるで、トラックのような女だと思う。

普通ならあり得ないと思うことだが、もう何度も体験したせいで、

感覚が鈍っている。もうこれも日常だ。

初めての時は衝撃だった。女の子にぶつかって吹き飛ばなんて、考えたこともなかったからだ。

いや、考えたことがある人の方がどうかしている。

宙に舞っているとき、僕は『これは夢だ。夢でなければ、俺は死んでしまったんだろっ』と思った。

地面について、やっと夢でもなく、自分が生きていることが分かった。

「痛い……」

この女はいつも絶対回避不可能の突進をしてくる女なのだ。

「奏先輩、こんにちは。いっしょに部活行きましょ〜」

「奈緒美ちゃん、こんにちは。いつも元気ね」

奈緒美は何事もなかったかのように、奏に挨拶をしていた。

まったく、元氣すぎるくらいだ。少しはおとなしくしてもらいたい。

「おい！！人を吹き飛ばしておいて、あいさつすらなしか、このやる〜！！」

（まあ、こんな状態であいさつされても困るんだがな。）

「あ、たちもり日月先輩。こんにちは。なんで地面とキスしてるんですか？？」

こいつ、こんな状態でもまったく動じない、さわやかなやつだ。

「お前のせいだろ！！ちゃんと人がいないか確認して走れよ」

「えへへへ。すみません、すみません。なんか日月先輩たちもりならいいかなってなっっちゃって〜」

「確信犯かよ！！」

（こいつ、絶対俺のこと先輩っておもってねえ）

悪かったなんてみじんも感じてないような笑みで僕を見ている。

「ってか、どうなってんだよ！！お前は怪物か！？」

「人間です」

キツパリといった。

「知ってるよ！！いや、人間じゃねえ。人間は人を撥ねることなん

かできねえよ!!」

「本当に日月先輩はひどいなあ。ぼくが人間じゃなかったら何だっ
ていうんですか?」

奈緒美は自分の事を『ぼく』と言う。これも女子に好かれる所だ。

「うん……。なんなんだろう。化け物かな」

「先輩、無礼を承知で聞きます。殴ってもいいですか??」

奈緒美は手を胸の前でグーに握っている。そんなことをされれば、
ひとたまりもないだろう。

「やめてくれ、そんなことをされたらホントに死んでしまう……」

(ま、まあ、無自覚だろうが、奏とのさっきの会話の事で助かった
し、これで許してやるか。)

僕はにこにことした表情を奈緒美に向ける。

奈緒美はただ者ではないが、話していると結構楽しい。

「遊んでないで、そろそろ部活へ行くよ」

奏があきれたように言う。

(いけない。つい、立ち話をしてしまった。って、遊んでないし)

「奏には俺が遊んでいるように見えるというのか!?!」

「うん(キツパリ)」

「私は先輩と話していて、結構面白いですよ」

「俺は面白くねえよ」

そんな会話をしながら、部室へと急いだ。意外と面白いかもしれない。だが、そんなことを言うと、また宙に舞うことになりそうなのでやめておいた。

奈緒美も、結構かわいいところがある自慢の後輩だ。撥ね飛ばさなければもっといいんだけどね。

「あっ!!」

奈緒美は突然大声を上げて立ち止まった。

「そういえば今日委員会あるんだっ!?!じゃあ、雨が降りそうだったので、もし部活があれば、神宮寺部長じんぐうじに遅れるって言うておいてもらえませんか??」

「そっぴや奈緒美、体育委員やってるんだっけ。わかった。言っとくよ」

「ありがとうございま〜〜〜すう」
ダダダダダダダダダダ!!!

行ってしまった。騒がしい奴だ。この後、何人の犠牲者がでるのか、予想もつかない。

(気をつけるよ、みんな!!!)

心の中でそつとつぶやいた。と、窓の外が目に入る。

「あ、雨だ……」

そんなことをしている間に、外は雨が降っていた。薄暗い雲が広がって、空が全く見えない。不気味だ。

「妹の予想通り、降ってきやがったな。」

「朝はあんなにいい天気だったのにね。これだと、部活無いかもね」

「だな、でも一応部長に聞いたところか。とりあえず部室に行こうぜ」
「うん」

また、二人つきりになった僕たちは、一緒に部室のある外を目指す。雨が降っていたので、少し小走りで向かった。

05 幸せレイン

僕の通っている学校は私立高校でもないのに校舎がかなり広い。新館、旧館、体育館、部室棟の四つでできているのだが、それらがすべて十階建てだ。

それにもかかわらず、エレベーターが一つもないというのが問題だ。上下の移動は各館の中央にある螺旋階段のみ。これは地獄に近い。夏なんか移動教室のたびに汗が噴き出してくる。まったくお金があるのかないのかわからない。

まあ、そのおかげで、一つの部活動につき一部屋、部室を与えられているので文句は言えないのだが、やっぱりエレベーターぐらいつけてほしいものだ。

幸い、陸上部の部室は三階にあるので、さほど困らない。

「今日は部活はないですよ」
部室に入ると、部長の神宮寺零（かみやうじ むろ）がいた。ミステリアスな雰囲気をまとい、色白でハーフのような顔（実際のところはどうか知らない）、金色のロングヘアで縦ロールというこの時代に珍しい髪は清らかで美しく、まるでどこぞのお嬢様のようにだ。

実際は、見た目とは違い、どこかの神社の生まれで、巫女をしているらしい。体は細く、触ると壊れてしまいそうに可憐だが、なかなかグラマーだ。

この人が陸上部の部長といわれても、絶対に嘘だといいたくなるような容姿だ。

性格もおしとやかで、家柄のせいか可憐な動きで上品な立ち振る舞いをするのだが、ふわふわしていてどこか危なっかしいところも魅力だ。

このため、先輩に告白した人はたくさんいる。

中にはイケメンもいたのだが、誰一人としていい返事をもらった人はいないらしい。玉砕だ。

この先輩のおかげで、陸上部の部室はとてもきれいになっている。高そうな食器やら機械やらが並んでいるのだが、これらはすべて先輩の私物だ。休憩時間になると、ケーキとお茶を入れてくれる。

まあ、これが僕がこの部に入った理由の一つでもある。

「あ、そうなんですか」

「残念ね。それとも、うれしいのかしら？」

「あはは、どちらかといえば嬉しいですね」

「日月君はもつと真剣に部活しなきゃ！真面目にやればすごいんだから」

奏は僕を励ますようにそういった。

（今度から真面目に練習しようかな？）

「そうですね。日月君、私より速いものね」

褒めているつもりなのだろうが、僕はいまだに神宮寺先輩より足の遅い人は見たことがない。

熱心に練習しているし、いい人だからそんなことは口が裂けても言えないのだけれども。

「先輩はずっとここにいますか？」

「ええ、そのつもりですよ。ここだと、家と違ってゆったりとできるから」

ゆったりしていない先輩なんて全く想像ができない。何かの冗談だろうか？

こつちもボケた方がいいのかな。

「そうなんですか」。家だと、親から巫女になるための修行とかさせられてるんじゃないですか？？」

「そうなのよ。生霊ウツロウや死霊シレイを呪文で招き寄せようとしているのだけれども、難しいのよ」

「へえ〜……。そ、そうなんですか」

「ええ、そうなの」

……
そうだった。この人は天然なのだ。これも冗談ではなく本気で言っ

ているのだろう。

隣にいる奏に助けを求めるようにちらつと見ると、にににしながら目で何かを訴えかけている。

（早く帰りたいのかな？）

「えっと……それじゃあ、僕たち帰りますんで」

「そうなの？気をつけて帰りなさいね」

「はあ〜い。ありがとうございます」

僕と奏は、部室から出て家に帰ろうとしていた。さっきよりも雨が強くなっている。

「私……傘持って来てなかった……」

奏が困ったように言う。

「……」

（ここはチャンスだ！！ありがとう、妹よ！！帰ったら思いっきり抱きしめてあげるからな！！）

「ぼ、僕、傘持ってきてるから、貸すよ」

（言えた〜！！やったぞ僕！！初めてちゃんとかつこよく決めれたぜい。）

震えた声で言ったが、多分伝わったのだろう。奏はびっくりしたような顔をこちらに向けている。

「二つ持つてるの??」

「えっと……。一つしかないんだけどね」

なぜ僕は二つ持っていなかったんだと、嘆いてはいられなかった。自分より奏を優先する。

「え、それなのに、いいの??」

うれしそうだった。そう。この笑顔を見るためにこんなことを言ったのだ。

「全然いいよ。こんな冬に雨にぬれて、奏ちゃんが熱を出して、学校休むの嫌だし」

少し恥ずかしいことを言ってしまった。奏を見ると、頬が少し赤く染まっているような気がした。

「ありがとう。……でも、日月君もぬれたら困るし。」

（心配してくれているのか！？なんとという優しさ！！まるで女神の様だ！！）

こんな時は誰でも心配するのだろうが、このときはまるで周りが見えていなかった。

ただ、奏に心配されているということがうれしかった。

「僕は大丈夫だよ」

「そんなことないよ。寒いのに……私のせいで風邪をひいちゃったら……」

「でも……」

二人の間に沈黙が訪れる。聞こえるのはザアザアと降る雨の音だけ。（どう説得すればいいんだ？）

いろいろ考えたが、いい案が浮かばなかった。静かな時間。気まずい。

そして、俯いたままの奏が沈黙を破った。

「……じゃあ、二人で入って帰る」

少し照れたように笑いながら、僕にとんでもない提案をしてきた。

「うん。……って、え？？」

（あれ、今なんていった？二人で入って？一つの傘に？それって、相合い傘ってやつか！！？そんなものがこの世界に実在するというのが！？）

僕には、奏が本気でそんなことを言っているのかを確かめる方法はなかった。

というよりも、これが夢かどうかもわからない状態で、ポカンと口をあけ、多分、間抜けな顔をしていたと思う。

「嫌じゃなければ……」

「……」

（何だこのかわいい生物は！？ほんとに人間なのか！？この可愛さ

は人間レベルじゃね〜。)

「ダメ……かな？」

そしてもう一度僕の方を振り返り、少し恥ずかしそうにして僕を見るその目に、僕はくらくらしてしまった。

「いやいやいや、そんな……」

「嫌なの？」

「あつ、嫌じゃないよ。うん。したい。今すぐ傘をさしたいです」

「うふふ。へんなの」

「そうです。僕はへんです」

(こないいい事があるわけがない。そうだ、騙されないぞ。ここから何かが起きるんだ。絶対そうだ。)

「どうしたの、そんなきよるきよる周りを見て。あつ、やっぱり、私と相合い傘してるとこなんて、誰にも見られたくないよね」

「ち、違つよ。これはそういうのじゃなくて……じゃあ、帰ろ〜」

「え、あ、うん!!」

(こ、これは、いけるパターンなのか？そうなのか。よろこんでいいんだよな？もうなにもないよな？)

高まる感情を抑えながら、僕は傘を開いた。奏が近づいて傘の中に入った。

奏の体がすぐ隣にあった。肩が触れる。奏の整った髪が、僕の首筋に……

(やばい。なんかドキドキしてきた。)

「それじゃあ、行こっか」

奏は満面の笑みでそういった。

「うん!!」

誰でも女の子と二人で帰りたいという夢を持ったことがあるだろう。僕も妹としか二人で帰ったことがない。

それがこんなに突然、相合傘だなんて……しかも、今一番気になつてる女の子と。

うれしくてうれしくてたまらない。そんな天にも昇るような気持ち

だった。

(で、でも、これも、僕が雨にぬれることを心配しての事だよな。別に、僕に気があるわけじゃないんだよな。奏はやさしいからなあ) 少し残念に思いながら、ゆっくりと歩く。

「うふふふ」

奏が隣でにこにここと笑っている。その顔にドキッとしてしまった。

(気があるとか、今はどうでもいいか。……ずっとこのままだったらしいのになあ)

幸せな時間。雨が降っていて、周りは暗くて不気味なはずなのに、いつもよりきれいに見えた。恋をすると周りが見えなくなるというが、これもその一つなのだろうか。

二人つきりでいるわけなので、何か会話を振らなければ沈黙が生まれてしまう。

(何を話そう。いままで二人で話すこともあまりなかったから、どうすればいいかわからない)

二人とも黙ったまま、ゆっくり歩いて行く。肩が触れ合う。それだけで、僕はドキドキして幸せだった。

(奏はどう思っているのかな??)

そんなことを思いながら、横を見る。

きれいな顔が少し赤い。しかし、楽しそうに見えた。と、僕の視線にきずいたのか、ふと顔を上げる。

.....

お互いの目が合う。顔と顔の距離が30?あるかどうかの距離。すごく緊張する。顔から火が出そうだ。

「っ!!」

おもわず目をそらしてしまう、へたれな自分を嘆く。

「うふふふ」

奏が笑っている。奏は平気なのだろうか。ドキドキしているのも、僕だけなのかもしれない。

そんな幸せな空間が広がっている中、少し先に黒くて小さい何かが見えた。

「あ、あれ、なんだろう?」

「うーん……暗くてよく見えない……」

あれは……ネコ??でも、雨の中で道路にいるなんて珍しいな。

「黒いネコじゃないのか??」

「え、全然見えないよ」

僕たちは、ゆっくりとソレに近づいていった。

(このネコ、どこかで見たことがあるような……)

「あーっ!!ホントだ。黒いネコちゃんだ」。日月君、よく見えたね」

ネコの事も考えていたが、今は自分が普通に話せていることに驚いていた。

「あはは、昔から暗い中でよく見えるんだよね。……、首輪がついてるってことは飼いネコか??」

だんだんネコに近づいていく。ネコは雨の中、道の真ん中で寝ているようだった。様子がおかしい。

「……って、赤い!!背中から血が出てる!!」

「うわあぁぁ、ひどい傷!!どうしよう!!日月くん」

「ごめん、傘持って帰って。僕、このネコを病院に連れて行くから!!」

僕は傘を奏に渡してネコを優しく持ち上げる。長い間雨に打たれていたようで、体が氷のように冷たい。

「日月君……」

「大丈夫。心配しないで。じゃあ!」

ネコを抱きしめ、冷たい雨の中へと飛び出していった。

06 突然レスキュー（前書き）

最近、文章の書き方がもつと下手になってきました。

もうちょっと研究して、美しい文を書けるように頑張ります!!

06 突然レスキュー

「はあ、はあ、はあ。病院、病院はどこだ??」

今、僕は冷たい雨に打たれながら必死になつて走っている。

なぜ、今見たばかりのネコにこんなに真剣になれるのかは、自分でもわからない。ただ、このネコを助けたかっただけだと思う。

寒い。体温がどんどん雨に奪い取られていく。明日絶対風邪をひいているだろう。

(奏が風邪をひかないようにつて、相合傘をしてたのに、意味がなくなつちまつたな)

少し前の事を思い出して、少し顔がにやける。

「奏と相合傘しちまつたよ〜。へへ。こんなこと初めてだぜ」

もう、顔がにやけている何でもんじゃない。幸せすぎて、ふにゃふにゃの顔をしているだろう。

「さつきはせつかくいい感じだったのによ。お前のせいだぜ。へへ。」

「にゃ……」

微かにネコが鳴いた。前足をゆっくり動かししている。

「おつ、目が覚めたか?まつてるよ。今病院へ運んでやるからな」

「にゃ……にゃあ!!」

その黒いネコは、僕の腕の中で暴れながら、力強く鳴いた。怪我をしているせいか、あまり力が入っていない。

「なんだよ。病院へ連れてってやるって言ってんだろ」

「にゃあ。にゃ〜」

ネコは苦しそうにしながら首輪をひっかいている。

まったく飼い主のやつは何をしているんだ。自分の飼っているネコがこんなに苦しそうなのに。

首輪に住所とか書いてないかを確認しようとする。

いまいちよくわからないのだけど、最近では、ペット用の電話番号

が書いてあったりもするらしい。本当にすごい時代になったものだ。
「…………あれ??」

よく見てみると、ネコについている首輪、それはネコの気持ちがかかるはずの首輪、『ネコネコ話せる君』だった。

「お前もこんなものつけられてんだな」

「にゃあ」

(やっぱりこの首輪広まっているんだ)

首輪を買った時の事を思い出して、少し悲しくなった。せつかく僕のお小遣いから高いお金を出して買ってあげたのに、全然しゃべらなくて、もう泣きそうだった。

「高かったなあ。お前の主人も騙されたんだなあ」

「にゃあ」

まだネコは首輪をひっかくことをやめない。苦しいのか？

「ん…………？電源、オフになってる」

そして、電源を入れる。

別にこの首輪で、今の猫の気持ちがわかると思ったわけではなかった。

ただ、なんとなく。なんとなく、もしかしたら少しぐらいネコがどういう気持ちかわかるかなという好奇心だ。

「ON」と

「…………」

しゃべらない…………

「やっぱり、これダメなんじゃねえか。会社に文句つけてやるうかな」

まあ、期待していたわけではないので、そんなに残念ではなかった。(そうだな、しゃべるわけがないよな)

いや、しかし、最初につけたときのショックは大きかった。そんなことを考えていると。

「…………ありがとう」

僕の腕の中で声がした。

「……！」

下を見る。ネコが今にも消えそうな声で言ったようだ。いや、実際には首輪の機械が声を出したのだけだ。

「……あ、いや、どういたしまして」

慌てて、返事をしてしまった。

（まあ、ありがとうぐらいはしゃべってもおかしくないか。何驚いてるんだろ）

なんか無性に恥ずかしくなった。周りを見るが、誰も見てはいないようだった。

はははと笑いながら、照れ隠しをする。

（こんなこといってもわからないことは、うちのネコ、シロのおかげで知ってるんだけどな）

「わかるぞ」

「えっ……！……今なんて……??」

「私はお前の言う事がわかると言っただんだ」

「…………！！！」

（あれ、今、僕声に出したっけ??ってか、そのまえにネコってこんなに喋れるもんなの??喋らなかつたのはシロが馬鹿なだけか??ってか、ネコって読心術が使えるのか??）

驚いて、頭の中がぐしゃぐしゃになる。今の状況が全く理解できていない。

「まったく、めんどくさいやつだな」。お前は声に出してないよ」

「えっ、じゃあ何で!??」

「痛い痛い。わかった。説明するからいったん放せ」

興奮してネコを持つ手に力が入っていた。

「ご、ごめん」

そつとネコを下ろしてやる。ネコは今にも倒れるんじゃないかというぐらいフラフラとしながらどこかへ行こうとしている。

ネコが話すことに驚いて忘れてたけど、そういえば、このネコ、怪我してるんだった。

「まっつて。血、血が出るよー!!」

「言われなくてもわかってる」

「ねえ、どこいくの??? やっぱり、病院にいこうよ」

「いいから、黙ってついて来て」

「ついて来てっつて、どこに?」

「黙ってついてきてー!!」

「……」

ただのネコ（しゃべっている時点でただの猫ではないが）のはずなのに、気迫がある。

僕はその気迫に気圧されて、黙ってそのネコの後ろをついていった。なんか、えらそうなネコだなあ。

「悪かったな。えらそうで」

「だっ、だから、何で声に出してないのに僕の思ってる事がわかるんだよー!!」

「ふんっ!! 何がいい感じだったのにな。だ。へらへらして、情けないな」

「う、うるせえよ」

ネコは少し怒ったのか、足を速めた。

「なんだよ。」と思ったが、あんまり変な事を思ったらそれもこのネコに知られてしまうと思ったので、何も考えずに、ただただ、ネコの後ろをついていった。

（やっぱりこのネコ、見たことがある）

まだ5時ごろだというのに、あたりは暗く、雲の隙間から細く伸びた月が出ていた。

「なあ、お前、前にどこかであったことがあるか??」

「……」

返事がない。

ネコは無口だった。怪我をしているせいかもしれないが、話しかけても何の返事も無い。

(いったいどこに連れていく気だよ。つとあぶねえ、聞かれてるんだった。無心無心)

僕はネコについて行った。何も考えずに見ず知らずのネコについていくのはどうなのだろうとは思いながら、怪我もしているので最後までついていくことにした。

どれくらい歩いた頃か、ネコが突然言った。

「ついたぞ」

見ると、そこには家があった。一軒家だ。電気はついていない。誰もいないのだろうか??

「ここは??」

「私の家だ」

「お前の?? やっぱり飼いネコだったんだな」

「飼いネコではない。と、ここでお前に頼みがある」

飼いネコではないというのは少し気になったが、ネコが真剣な顔つき(どの顔が真剣な顔なのかははっきりとは分からない)で聞いてきたのでそつちを優先した。

「頼み?? なんだよ」

何を頼まれるのか全く予想できなかったが、悪い予感しかしなかった。

「この家に入って、リビングの机に置いてあるカバンを持ってきてほしい」

「カバン? 嫌だよ。そんなことをしたら、僕が警察に捕まるじゃね〜か」

(ほら来た。悪い事だ。誰がこんなネコのために牢屋に入るか。)
普通、人の家に入って物を取って外に出たら警察に捕まる。

いくらネコに頼まれたからと言って、そんなことが警察に通用するはずがない。

「大丈夫だ。ここは私の家だって言ってるだろ。私が許してるんだ

から、警察につかまる事はない。絶対だ」

「お前の家って、お前の主人の家だろ」

「違う。私に主人はいない」

ネコは平然とした態度で顔色一つ変えずに言った。まあ、ネコが顔色変えたところでわかるかどうかは微妙だが。

「それって、もう死んだってことか？」

「そうでもない。もともたないんだよ。もういいから早く取って来い!!」

(うそ臭い。首輪つけてんのに、飼い主がいないわけが無いだろ。)
ネコは僕を試してからかかっているのだろうか??それとも、本気で言っているのだろうか?

「……そのカバン、大事なもののか??」

「ああ、絶対に必要だ。 お願いだ……」

小さく消え入りそうな声でそう言われた。

僕はそんな言葉に弱かった。そういわれて無視することができような人間じゃない。無視なんかすると、これから一生その罪悪感を抱えながら生きていかなければならない。

(僕はまたこんな事に巻き込まれてしまった。まあ、これが僕の運命なのかな??)

「何かつこつけてるんだ??お前」

「だから、人の心を読むなって。……わかったよ。ほんとに大丈夫なんだろうな」

「しつこい!!ああ、大丈夫だ。警察には捕まらない」

「そっか。じゃあ、ささつとそれを取って来るよ」

「ありがとう。 ちなみに、家の電気はつけるなよ」

……

(あれ、今何かおかしな方向へ行っただ気がする……)

今の言葉で僕の不安が何百倍にも膨れ上がった。

全然問題ない家に入るのに、なぜ電気をつけてはいけないんだ??

おかしい、絶対おかしい。

「はあ??何でだよ。やつぱりこれって不法侵入じゃ……」

「無いって。大丈夫だから。そのほうがスリルがあるだろ」

「そんなものはいらぬい。」

「スリルなんて求めてねえよ。何にもないんだったら電気つけてもいいだろ」

「別に電気つけてもいいが……私は知らないぞ」

「うぐっ」

このネコ、なかなかやりやがる。コイツが人間だったら僕はコイツに散々もてあそばれていただろう。今でも振り回されているし。

(危険な香りがする。絶対悪い事が起こるに決まってる。……でも、こいつ怪我してるし……)

僕には行く以外の選択肢はなかった。

「……わかったよ。電気つけなきゃいいんだろ。ったく」

「なかなかものわかりがいいな。がんばれよ ……まあ、

警察以外のやつらに捕まらないようにな……」

(あれ、今ネコがボソツと何か言ったような気がしたんだけど……まあ、いつか。)

これ以上考えても不安が募るばかりだと思ったので、時間が遅くならないうちに取りに行くことにした。

「じゃあ、いつて来る」

(あゝあ、初めての犯罪か……少し心臓がドキドキする。ミッシヨンはカバンを持ってくるだけ。敵はいない。簡単な事だ。ネコに命令されているのは気に入らないけど。)

「……頑張れ」

後ろでネコが応援している。これもあの怪我しているネコのためだ。中には、怪我の薬とかが入っているに違いない。

そうして、僕はゆっくりと家のドアノブに手をかけた。

06 突然レスキュー（後書き）

やっと、物語が動いてきました。

ネコちゃん。やっぱりかわいいですね。

これからどんどん深くなっていくので、楽しみにしててください
！！

後、お気に入り登録をしてくださった方、誠にありがとうございました。
す。

すっごくうれしいです。

では、感想待ってま〜す。

07 家ダーク

家の中は、真っ暗だった。カーテンも閉めてあるのか、他の家の電気の光や月の光さえ入らない。闇の世界だった。

なんで電気をつけてはいけないのかはわからなかったが、ネコが真剣に言っていて、危ない気がしたので明かりをつけずに進んだ。

真っ暗だったがだんだん目が慣れてくる。

それでもこの暗さなら普通の人だとまったく見えないだろう。幸い、僕の目がいいおかげでうつすらとあたりが見える。

「な、なんだあ??」

よく見ると、家の中は散らかり放題で無法地帯になっていた。そして、すごく臭い。

そこそこ広い家なのに、ゴミのせいで床が見えないほどゴミがある。まるでゴミ屋敷だ。

いつからゴミをためればこんなにたまるんだ??

「アイツ、全然掃除してねえな」。って、アイツの飼い主か。さっさとかばんとって帰ろ」

まったくどうやったたらこんな家になるのかわからない。というか、人が住めるような状態じゃない。いつもどうやって家に入ってるんだろうか??

どう考えても家に入る場所がない。ベランダから入るっていうのなら納得だが、自分の家にベランダから入るっていうのもどうなのだろうか。

少しずつゴミをよけて道を作りながらリビングに向かった。

家が広く、暗くてどこに行っていていいかわからない上、ゴミが山のようにあるせいでリビングにたどり着くまでに10分ほどかかった。

リビングも同じでゴミが広がっている。これじゃあまったくくつろげそうもない。そしてここが一番くさい!!!

「あ、これのことだな」

こんなに部屋は汚いの、机の上はきれいで、このカバンだけしか置いてなかったの、簡単にそれだとわかった。男子高校生が部活でよく使うような、黒い大きめのカバンだ。

「う、重い……。なに入ってんだ?? まあいいや、それじゃあ、後は帰るだけ……」

「ドダツ!」

「!?? な、なんだ??」

何かが落ちてきたようなそんな音がした。

(あのネコ誰もいないっていったよな?? じゃあ今のはなんなんだ??)

ただ音がしただけなのにビビりすぎなのかもしれない。僕はこういうのが苦手なわけではない。

それでも、他人の家に侵入した上、周りがうつすらとしか見えないとなると、少し物音がしただけでも相当怖い。

ビビって当然だ。

(ごみの山が崩れたのか??)

……

静かになった。

だが、違う。なにか……いる。そんな気がした。

「誰かいるんですか??」

「……」

「あの、濡れたまま勝手に入ってしまって、すみません」

「……」

何の音もしなかった。でも、少し見える。目の前に絶対何かいる!! 僕は恐怖に襲われた。この家の人ではないだろう。よくわからないが、ただ者じゃない、そんな気がした。

「はあ、はあ」

よくわからない何かと向かい合っているだけで息が荒れてきた。

動けない。うかつに動く大変なことになると僕の本能が叫んでいる。

見えないそれは、人なのだろう。だが、様子がおかしい。この静かな空間でそいつの音がない。息の音すら全く聞こえない。

(逃げた方がいいのかな??? つか、ネコのやつ、こんなこと言っ
てなかったじゃねえか!!)

心の中でネコを恨む。だが、そうしていても何の解決にもならない。
僕は必死に頭を回転させる。

何もしない時間が続く。時間をこんなに長いと感じたことはない。
実際には十分くらいしかたっていないのだろうが、もう何時間もず
つとこのままでいるような感じがする。

(逃げたい……。逃げたい、逃げたい、逃げたい)

ただ立っているだけのはずだ。相手も全く動いていない。それなの
に頭がくらくらする。僕の息が荒れて、普通に呼吸ができない。

「はあ、はあ、はあ」

緊張のせいか、精神的に疲れてくる。もう、気が狂いそうだ。

「はあ、はあ、はあ」

苦しい時間がゆっくりと流れる。まるで、地獄の中に放り込まれた
かのような。

(呼吸ってなんだったつけ?? つか、今何してるんだっ

け?? 何でこんなにしんどいの??)

完全におかしな状態になっているが、体は動かなかった。意地でも
動かさないと、足を踏ん張り、耐えている。

(逃げたい、逃げたい、逃げたい、逃げたい、逃げたい!)

もう限界だった。

「!」

気付いた時には、片足を一步後ろにひいていた。

ただそれだけだ。ただそれだけの動作で、この空間の気が変わった。
殺気というのか、けたたましい何かの重圧に潰されそうになる。

一瞬にして世界が崩壊してしまうような、そんな感覚だった。

(苦しい……)

「……………!!」

ビュン

風を切る音がする。

突然、何かが飛んできた。

窮地の状態に追い込まれることで、感覚が限界まで研ぎ澄まされている。

そのおかげで飛んでくるものがよく見えたので、なんとかよけられた。

「な、!?」

ゆっくりと後ろを振り返ると、それは後ろの壁に刺さっていた。

ナイフ!!

「な、ナイフ!? な、なんで? 意味が分からない。どういうこと? 何? 何? 何!?!」

僕は慌てて外へ逃げようとした。

ここまで来たら、もう動かない方がいいとか関係ない。全力で逃げ切る、これしか生き残る方法はない。

(やばい。絶対やばいよアイツ。狂ってる。ナイフとかありえないよ!!!)

ひたすら走った。後ろにアイツの気配がある。怖い。全身が恐怖で震えあがりそうだ。

恐怖で体が動かなくなりそうなのをなんとかこらえながら出口を目指す。

「逃げないと、殺される……………」

後ろからナイフが飛んでくる。僕は逃げた。行く時に通った道を全力で駆け抜ける。道がよく見えた。

「はあ、はあ、はあ」

すぐ後ろから、ゴミにぶつかる音がする。アイツはあまり見えていないようだ。

(走れ、走れ、走れ、走れ!!!)

後ろを振り向かなかった。振り向いたら追いつかれると思ったから、

前だけを見て、ただ、ひたすら走った。そして、外へ出た。雨はもう降ってはいなかったが、家の中と同じ、真っ暗だ。

「!?!」

そこには、いるはずのネコがいなかった。

「おい、ネコ!どこにいるんだ!?ネコオ!!!!!!」

あたりは静まり返っていて、暗闇に僕の声だけが響く。

怖かった。その場から、すぐに立ち去りたかった。

「つくそ」

家から音が聞こえる。

(もうやけくそだ。くそつ。くそつ。くそつ!!!)

僕は走りだした。今までこんなに速く走った事ないくらい速く走った。風の音しか聞こえない。できるだけ遠くへと、走った。

10kmぐらいだろうか?長い距離を死に物狂いで走った。そして、今は体から湯気を出しながら道の真ん中に倒れている。

「はぁ、はぁ」

肺が潰れそうだ。心臓も痛いくらいに強く、ドクドクと動いている。どうやら、僕は逃げ切ったらしい。安心して、全身の力が抜ける。もう一歩たりとも動けない。

(誰も追ってきてはいない。アイツ、なんだったんだ?なんで僕は殺されかけたんだ?ネコは?ネコはどこに行ったんだよ!?)

疲労でくらくらする。冬の冷たい雨に濡れたせいもあるだろう。意識がうすれてきた。

「私はここにいるぞ」

「アツ!!!」

目の前に黒いネコがいた。

その猫を見た瞬間、無性に腹が立ってくる。怒りが腹の底からどんどんあふれ出てくる感じた。

「よく、生きて出てきたな」

「生きてつて、お前！！」

（やっぱり、コイツ、こうなること知ってやがったんだ！！くそつ！！なんだよ！！）

いろいろ言つてやりたいことがあつたが、舌が回らなくて言えなかつた。

小さな一匹の黒いネコにはめられたことが悔しかったのも少しはあるが、それよりも何も話してくれなかつたことに腹が立った。

もっと信用してすべてを話してほしい、そう思った。

（なんだよ、そんなに頼りなさそうかよ！！俺は……もうみんなを守る人になつたと思つたのに……）

目から涙があふれてきた。

悔しい、何もできなかつた自分が悔しい。

五年前の事が頭をよぎり、余計に僕を苦しめる。

僕が小学六年生の時、ある事件が起きた。それは、残酷で、ひどい事件。そのひどい事件に僕とある女の子が巻き込まれた。

何が起きたかははっきりと覚えていない。

僕が覚えていること、それは、事件のせいではあつたが、僕自身が大好きだつた一人の女の子を傷つけてしまったこと。

どうやってかは覚えていない。だが、僕が傷つけた。

重症だつた。その女の子は大きな病院に運ばれたため、転校してしまつた。

それからは一切会つていない。

涙が止まらなかつた。つらくて、つらくて。死んでしまおうかと思つた。

だけど、僕は決めた。それを償うために、誰かを守れる人になろうと。

償えるかはわからないが、それしかないと思つた。

でも、今でも僕は安心してすべてを話せるような人にはなつてなかつたみたいだ。

(無理……なのかな)

「……、でも、今、お前はカバンを持ってきてくれた」
「……!」

ネコが顔の横でこっちを見ている。

安心させてくれようとしているのはわかったが、無性に腹が立った。

「お前に何がわかるんだよ!」

「まあ、そう怒るなよ。色々あったんだろ?」

……

ありがとな」

そう言っつて、ネコが僕から離れる。

そしてカバンに近づき、口を使って器用にチャックを開け、その中へと入っつていった。

「お前、何して……」

やばい、もう意識が……消えそうだ。

(家に、家に帰らないと、妹が待ってる。でも、ここから結構距離があるな……)

消えそうな意識の中、頭に妹の姿が浮かぶ。

(帰らないと……)

必死に動かそうとするが、体は動かない。こんな状態になっても、僕は妹の事を心配していた。

「今度は、私が助けてやるから……」

「えっ……」

「……!」

ネコがカバンの中で何かを叫んだ。その瞬間、光が現れ、僕を優しく包み込む。

空を飛んでいるような感覚だった。どこかで覚えがある。

(……夢???)

僕の目の前が真っ白になった……

08 目覚めフラッシュ（前書き）

注意：この前書きは本編とは全く関係がありません。

最近考えること

ラブストーリーを作っている漫画家さんや作家さんって、リア充の人が多いのかなあ？

それとも、二次元の住人かなあ???

気になります!!

08 目覚めフラッシュ

「ん、うう……」

気がつくと、僕は自分の部屋のベッドで寝ていた。

ゆっくりと体を起こすと、全身がだるく、頭が痛いのに気が付いた。熱があるようだ。

電気はついていないが部屋は明るく、開いたままの窓から光が差し込んでいる。

（もう朝……さっきのは夢だったのか。熱が出てる時の夢って、現実っぽいんだよね。）

妙にリアルな夢だった。

（どこまでが夢だったんだろう?? 奏と相合傘で帰ったのは夢なのかな??）

でも、いい夢だった。

途中までは……だ。

何であんな夢を見たんだ? 精神的に追い込まれているのかもしれない。きつとそうだ。あんなことあるわけがない。

そう思っつて、自分を安心させる。

ドタドタドタドタ!!!!

「ガチャ」

足音の後、ドアが開く音がした。

そこには、妹が立っつていて、僕と目があつた。

「部屋に入るときはノックぐらい……………」

「おに……ちや……ん!!」

僕の言葉をさえぎり、いきなり妹が飛び掛かつて来た。

「!?!」

「大丈夫? 生きてる?? いたくない??」

「お、おっつ……………」

木金きがねに思いつきり抱きつかれた。すこし、やわらかい。

（昨日は僕が抱きついでやろうと思っつてただけだな。って、これも

夢だったのか??あれ、全然覚えてない。ホントにどこまでが夢だったんだ??)

僕は、ふわふわとした気分でした。(これは、熱のせいであって、妹の腕の中にいるからではない)

木金の手に入っている。少し震えていた。首筋を何かが流れる。(泣いているのか??でもなんで?)

状況はよくわからなかったが、僕は木金を優しく抱きしめ返し、頭をなでる。

だんだん木金が落ち着いてきた。

「大丈夫か?」

体を離して静かに聞いた。

手を離すと、体をくるりと後ろに向け、涙を拭いていた。

どうやら、泣いている顔は見せたくないらしい。

「それはこっちのセリフだよ」

そう言っで、こっちを向き直り、僕の両肩を持って、ゆっくりと僕を寝かした。

「心配したんだよ。家に帰ってきたら、お兄ちゃんが家の前で倒れてたから」

「えっ?家の前で??」

心配していた理由はそれが……

(どうということだ??家の前??何でそんなところで倒れてたんだ?)

全く覚えがない。倒れていたとしたら家から遠く離れた道路だろう。

「そっだよ。だから、わたしが頑張ってお兄ちゃんの部屋まで抱えてきてあげたんだから。大変だったんだよ」

(そんなことされてたのか。何でおれ起きてなかったんだよ!!) 本当に、優しい妹をもっていて、僕は幸せだと思っ。

「う、ごめん木金きかね」

「ふふ、別にいいよ。いつもお兄ちゃんにお世話になってるし。今日は学校休みだし、わたしがお世話してあげるね。あ、おかゆ作っ

てあるから、持ってくるね」

いつもより楽しそうだった。最近、木金と一緒に遊ぶことも少なくなっただからうれしいんだろう。

何かお礼をしてやらないとな。

「ありがとう。今度お前が大好きなケーキ買ってあげるからな」

「え、ホント!？」

目をキラキラさせて僕を見る。

「ほんとほんと。何でも買ってやるぞ」

「ありがとう。……あ、でも、それより見たい映画があるんだけど

……今度一緒に行ってくれない?? お金はもちろん、お

兄ちゃん負担で!！」

「え〜僕が払うのかよ」

木金と映画か〜……久しぶりだな。たまには付き合っただるか。

「ダメ……かな??」

「いいや、わかった。どこへでも行ってやるよ」

「やった〜。じゃあ、おかゆ持って来るね〜」

木金はおもちやをもらった子供の様に、飛び跳ねながら、キッチン

へと出て行った。

(やっぱ、木金もまだまだ子供だな。かわいいやつだ)

そう思っただけ起き上がると、不意にあるものが目に付いた。

「!??」

……

僕の机の上に、あるはずのないものがあつた。

黒いカバン……

それは 夢の中で見たカバンだ。

(なんて、あのカバンが俺の机の上?? あれは……夢じゃなかったのか!??)

たのか!?? ということは、あのネコは??)

「まったく、お前ってやつは誰にでもデレデレするんだな」

機械の音が聞こえる。

開きっぱなしの窓から、黒いネコが入ってきた。

「妹に変な気を起こすなんてどんな趣味をしてるんだ？お前は！？」
「ネ、ネコ！なんでここにいるんだよ。夢じゃなかったのか！？」
（つてか、変な気とか起こしてねーよ！！ちよっとかわいいなっと思っただけだろー！！）」

ネコはあきれた様子で布団の上にキチンと座った。

「全部実際にあつたことだ」

……………

実際に、あつた？

「えっ、…………じゃあなんで僕は家の前で倒れてたんだ？」

「私がそこまで運んできてやった」

（いや、無理だろ）

「お前が？どうやって？」

「それはだな……………」

そう言つて、ネコは後ろを振り返り、机の上にのぼった。そしてあの時のようにカバンの中に入ろうとした時。

「あ…………っ！！黒いネコちゃんだ…………！！」

おかゆを持った妹が部屋に入ってきた。

「このネコ、昨日お兄ちゃんが倒れてたここにいたんだよ」

「へえ……………」

ネコを見ると、かばんの中に入るのをやめて、僕の方を見ている。何かいいたそうだ。

（他の人に見られたらまずいのか？まったく、タイミングの悪いやつだ。）

「クロ…………。うふ…………」

「クロ??？」

「あつ、このネコの名前だよ。体の色が黒いからクロ。シロの友達になつてくれないかなあ」

（やっぱり、ネーミングセンスゼロだ）

黒いネコ（クロ）はもうどうでもいいといった感じで、カバンの横に座っていた。

「これ、おかゆ。わたしが食べさせてあげる」

そういつて、木金は僕が寝ているすぐ横に座った。何とか木金を部屋から出さないとな。

「いいよそんなの。それより、お前今日部活あるんだろ??」

木金は水泳部をやっている。成績はかなりよく、全国大会まで勝ち進むほどだ。今は冬だが、温水プールを設備した、超お嬢様学校（女子中）にかよっている為、冬でも普通に部活がある。

「あるけど〜。……うん。今日は部活休む!!」

「うれしいけど、だめだ。もうすぐ大会があるんだろ。僕のせいで負けたら嫌だからな」

「でも、お兄ちゃんが……」

「僕は木金のおかげでだいぶ楽になったから大丈夫だよ。」

「ほんと??」

心配そうな顔を僕に近づけて、上目遣いで僕を見てくる。顔が近いかわいかった。今日ぐらい別に一緒にいてもいいんじゃないか??

木金もそうしたいように見える。

（やっぱり、一緒にいてもらおうかな……）

そう思った瞬間、クロににらまれた気がした。完全に読まれている。

（わかってるよ。だから、僕の心を読むな）

クロはプイと窓の方に視線を逸らした。

仕方がないので、木金を説得することにした。

「ほんとだよ。木金には部活がんばってもらいたいしな」

「う〜ん……」

木金が心配そうな顔をしながら悩んでいる。

よし、もうひと押しだ。

「ほんとに、大丈夫だよ」

すると、木金はしぶしぶ頷いた。

「わかった。じゃあ部活行って来るよ。何かあったら、学校に電話してね。飛んで帰ってくるから」

木金の事だから電話をしたら本当にすぐに帰ってくるだろう。
なので、絶対電話はしないと心に決めた。

「ありがとう。……そうするよ」

木金きがねは部屋を出て、バタバタと準備をしにいった。

「……ほんとに騒がしい女だな。だいたい、コイツのどこがいいんだか……」

クロがあきれるように言った。

「そんなこというなよクロ〜。いい妹だぞ」

「誰がクロだ。このシスコンが!!」

(シスコン!? ひどすぎる!! ってあれ? この言葉前にも聞いたよ
うな気が……。僕、ホントにシスコンなのかな??)

信じたくない現実を知らされたとき、人はそれを否定するものだ。

「くっ、シスコンじゃない!! これは妹という家族に対する愛情であって、恋愛感情ではないぞ。」

「ふんっ。どうだかね〜。こんな所、あの女に見られたらどうなるか」

「なっ!!」

クロの言うあの女とは奏のことだろう。

「お、お前、いつんじゃねえぞ。言ったら……」

「お兄ちゃん、誰としゃべってるの??」

準備を終えた木金きがねが部屋に入ってきた。クロはそっぽを向いていた。

「いや……ちよつとクロとおしゃべりを……」

「クロと??」

木金は僕とクロとを交互に見る。

(変な奴だと思われたらどうな〜)

そうなるだろうと、半ば諦めかけたが、

「そうなんだ〜。いいな〜。わたしもしゃべりた〜い。」

全然問題なかった。

僕はそのまま笑顔で受け流す。

「木金きがねは部活だろ。がんばってこいよ」

「うん！ーじゃあ、クロちゃん、お兄ちゃんをよろしくね。いつてきま〜す」

そういつて、きかね木金は走って家を飛び出した。

「……やっといつた……」

「……。あの子、おかしいぞ。もう中学生なのに、普通、ネコしやべっている兄を見たら、頭おかしくなっただと思わないか??」

クロは心底びつくりしたような顔で言った。

あれ?中学生つて言ったっけ?まあ、服見ればわかるか。

「あいつは、あんなだからびつくりしねえんだよ」

「ふ〜ん。おかしなやつもいるもんだな」

自分の妹の事をおかしなやつ呼ばわりされるのは頭に來るが、今はそれを怒るより話さないといけないことがある。

(すっげー可愛い妹なんだぞ!!まったく)

「それより、さっきの話に戻るぞ」

「さっきの話??ああ、どうやってお前をつれてきたか。だったな」

「そうだよ。早く教えてくれよ」

「そう焦るなよ。今見せてやる」

クロは自信満々の顔でカバンの中に入っていた。完全にカバンに入り、中でもぞと動いている。

「??」

そして、少し時間がたって、言った。

「真の姿を取り戻せ!!リカバrecover!!」

!!!

「!?!な、なんだ!?!」

クロがそう言った瞬間、昨日と同じように目の前が白い光に包まれた。優しい光だ。だが、すぐに光は消えていった。

何が起きたか、まったく理解できない。

まあ、理解できる人間など、この世に存在しないと思うが……

光が薄れていくと、その中に何かがあるのが見えた。

「またせたで」

そこにはネコの姿はなく、綺麗な女の人が立っていた。

08 目覚めフラッシュ (後書き)

明日で夏休みが終わってしまうので、これからの更新は週一になるんじゃないかと思いますが、

今まで見てくださった方々、これからもよろしくお願いします。

初めての方々、これからも見ていただけると嬉しいです。

頑張らせていただきます!!

09 真実ワールド

光の中から現れたのは、フリルのついた黒いワンピースを着て、なぜか首輪をつけた、僕と同じ、高校生くらいの関西弁の女の人だった。

背中までかかる長い髪はまっ黒で、目も黒く、肌が白い分、黒さからはつきりと目立つ。

するりと伸びた手足と凹凸のないスレンダーな体型、僕の学校に入ったらマル秘校内美少女ランキングベスト3に入る事間違い無しだ。(これは女子には知られてはいけない、学校内の男子が秘密裏に勝手に作るものである。)

残念ながら悲しいほどぺったんこではあったが、見蕩れるほどにきれいだっただ。

そんな少女はにこにことしながら、試すような強い目で僕を見ている。少し吊り上がった目はまるでネコのようだ。

(すごく、きれいだ！！)

「じゃじゃ〜ん。どうや？結構綺麗やろ？見蕩れたらあかんで」その女はえっへんといったように体を反り、手を腰に当て胸を張っていた。だが、その胸はどれだけ堂々と張っても平らのままだった。まるでそびえたつ壁のようにまったいらだ。

我に返り、少女の言葉を日本語として頭で理解したところには、もうすでに見蕩れてしまっていたという事実が僕の頬を赤く染めた。

(恥ずかしい！！)

それを誤魔化すように慌てて質問をする。

「だ、誰ですか？？」

僕はぽかんと口をあけながらそういった。だから、ほとんどちゃんと発音できていなかったと思う。

『は、はへへふは？』ぐらいにしか聞こえてなかったんじゃないだろうか。

それぐらい、目の前の少女は綺麗だった。

「なんや？ほんまに見蕩れてしまったんかいな〜」
すべてお見通しだった。

少女はニヤニヤとした意地悪な笑みを浮かべて僕を見据えている。
（こんな綺麗な人、見たことあつたっけ？でも、見ていたら忘れるはずないと思うけど……）

そう考えていると、少女はにい〜と笑ってこう言った。

「だれって、ウチはさっきのネコやないか〜」

「……ネ、ネコ??？」

突然の事で全然状況が把握できていない。それにネコとか、この人にかかわれているに違いない。

（……この人どこから入ってきたんだ??しかも、机の上にたつてるし）

見蕩れてしまっていて気付かなかつたが、よく見ると、いろいろおかしな点があつた。

その少女は、腰に手を当てた体勢で、僕の机の上に立っている。しかもなぜかカバンに両足を突っ込んでいる。

一番おかしな点は首につけてある首輪、あれは明らかに『ネコネコ話せる君』だ。なぜこの人はつけているんだろ。（っていうか、やっぱり人も普通につけれるサイズだ）

怪しい。怪しすぎる!!

一度今の事をよく考えてみよう。

この状況はまるで、よくあるアニメの様だ。

……ということは、これから、突然現れた美少女とのラブロマンスが始まるのか？

幼馴染とかと色々絡み合つてモテモテライフをエンジョイすることになるのか!?

それも悪くないな……

……ってか、むしろ、いい!!

これは、いくなれば男のロマンってやつじゃないか!?

美少女サイコ〜〜!!!!

……いや、まで。普通に考えて、こんなことがあるはずがない。

……なるほど。

とうとう僕は妄想と現実の区別もつかなくなってしまったのか……そう。僕は、越えてはならない一線を越えてしまったのだ。

(だめだな……。犯罪だけは侵さないようにしよう……)
心の中でそっと誓った。みんなに迷惑をかけるわけにはいかないからな。

木金……。こんなお兄ちゃん、悪かったな。

でも、家族やお前には、迷惑かけないようにするから。

僕は自然とこんな妄想を繰り返してしまっような変態になってしまったが、安心しろ!!

変態は変態でも、紳士的な変態!!つまり、変態紳士になるから!!
「って何勝手に妄想にしてんねん!!ウチはちゃんとここにおるわ!!」

妄想によって出現した少女に声をかけられ、急に現実を引き戻された。

(ダメだ、僕!!ちゃんと認めるんだ。この子は僕の妄想だ。騙されるものか。現実になんかきれいな子がいるわけがない。それに僕の部屋に急に表れるなんて……現実見るよ、僕)

うんうんと頷きながら一人で納得をする。

「ええ加減にせい!!」

「痛!!」

妄想の中の少女の投げた国語辞典が僕のこめかみに命中した。

「いって~~~~!!お前、何すんだよ!!……って、え???」
痛い。僕のこめかみがジンジンと痛かった。

(妄想じゃ……ない?)

「だから違っつて言ってるやんか。ウチはホンマにおるっちゅうねん!!」

僕が目から涙を流しながら呆然としていて、女はフウとため息を吐いてあきれるように言った。

「アンタの妄想力は尋常じゃないわ。何が変態紳士やねん」

「……」

僕の妄想力が尋常じゃないと言われたことを落ち込んでいるわけではない。ただ、

（今、目の前にいる女が妄想じゃない??と言うことはまだお兄ちゃんは越えてなかったんだよ、木金!!）
というようなことを考えていた。

女の顔がみるみるうちに不機嫌そうになっていった。

とりあえず、冷静さを取り戻した僕はううんと咳払いをし、もう一度聞いてみる。

「……。で、誰?」

「だから、さっきのネコや言うてるやる。あんたの妹がクロっちゅうだっさい名前をつけられたネコや」

「えっ!?!?クロ???で、でも、クロはネコだし、関西弁じゃないし、ってかクロはどこ???」

「あゝもう、いっぺんにしゃべんなよ。まあすぐに理解できると思っていないから、いったん落ち着き。はい、深呼吸!」

僕はゆっくりと息を吸って、吐いた。繰り返しているうちに、少し落ち着いてきた。

（何か、眠たくなってきたな）

急によくわからないことが立て続けに起こったので、頭がパンクしそうだった。

とりあえず寝ようか。

「オイこら、落ち着きすぎやわ!!あんたは極端やねん。いいか、よくよう聞いとき。ウチはさっきのネコが変身してっというか、もともとは人で、ネコに変身してて、元に戻っただけや。」

よくわからない。

（いったい何をいつてるんだ!?!）

「変身つて、そんなのできるわけが……」

「それができんねや!!」

女はニヤニヤとした笑みを浮かべながら続けた。

「ウチはな、人間じゃなくて魔人やねん。それで、ある程度やけど魔法が使えんねん。変身するのも魔法を使ってしてるって訳や」

「魔人??魔法??そんなのあるわけがないだろ」

僕はこの瞬間、目の前の女が電波であることを確信した。

あまりこういうタイプの人間とはかわりあいたくなかった。

「でも実際、あんたの前で変身して見せたやん」

確かにその通りだった。これが夢でないのだとしたら、この世に魔法はある。そういうことなのだろう。

「……」

「それに、ネコのとくに標準語でしゃべってたのは、この機械、『ネコネコ話せる君』ってやつ?これも名前ださいな〜。腹立つことに、これ標準語でしかしゃべられへんからやねん」

女は首につけてある『ネコネコ話せる君』を指しながら「何で関西弁でしゃべられへんねん。差別やわ」とかぶつぶつ言っている。

「ついでに、この機械、ネコがつけるためじゃなくて、魔人がつけるために作られてんで。だから、ネコ用の首輪って売ってんのにこんなに大きく作られてんねん。それに、この機械を作ったのは人間界の人間。やっぱり人間は器用やなあ。魔人には絶対に作られへん魔人とか人間界とか、まったくよくわからなかった。

(話のつじつまはあってるかもしれないけど、そんなこと言われても、信じられないよ)

「信じられへん言われても、こっちは信じてもらうしかないねん」

「そうかもしれないけど……!?!」

僕はさっきまでの会話に不自然なことがあるのに気が付いた。

(僕は　信じられないとか言っただけ!?!これって……)

「えっ、心を読まれてる!?!ってことはやっぱりクロなのか?」

「だから最初からそう言ってるやないか!?!」

クロは机の上から降りて、一度伸びをした。

「ネコでおんのって結構疲れんねんさ〜」

「……なあ、クロ」

「ウチはクロとちゃうー！ウチの名前は宇佐美佳奈うさみかなや。佳奈かなって呼んで」

佳奈！？

その名前は、あまり聞きたいものじゃない。全身から汗が噴き出る。あの時のことがよみがえる。

苗字は違ったが、その名前は、昔、僕が傷つけた子の名前と同じだった。

（よくいる名前だ。落ち着け！！大丈夫だから。カナは、病院で治療を続けているはずだ）

どうにか自分を落ち着かせ、何もなかったかのようにふるまう。

「う、うん。宇佐美……さん」

「さんはいらんねん。ウチはあんたと同い年やねんから。下の名前で佳奈って呼び」

女はむっとした顔で僕を見ている。

「いや……でも……」

「下の名前で佳奈って呼び！！」

「……」

怖い！！

僕は俯いたまま、何も言えなかった。

その名前は呼びたくない。震えてくるから。また、人を傷つけてしまうんじゃないかと心配になるから。

「……大丈夫。呼んでも怒らへんって」

急に優しい顔で、佳奈はそう言った。

（そういうことじゃないんだけど……）

でも、なんだか安心する。佳奈の声はすごく優しくかった。

本当にカナに言われているような気がした。

「なあ??？」

「……………わかったよ」

僕は覚悟を決めた。

それを聞いて、佳奈はニコニコとした笑顔を僕に投げかける。

(やっぱり、この子かわいいな)

とりあえず、状況を理解しないと。

「佳奈」

「なに??」

「さっきの、心を読むのも、魔法なのか??」

「そうやで。テレパシーってやつやな」

(テレパシー??なんとなく聞いたことはある)

いまだに信じられなかったが、信じないわけにもいかないと思った。それに、何でだかわからないけど

りたい。

この子の力にな

「全部ちゃんと教えてくれないか。怪我してた事とか、魔法の事とか」

「うん。まあ、いわれんでもするつもりやってんけどな。よっしゃ。わかった。ぜくんぶ教えたるで」

「まず、この世界のことから教えたる。全部ホンマのことやから、よう聞いときや」

真面目な顔をした佳奈は僕のすぐ目の前に座って、説明を始めた。

「この世は5つの世界でできてる。まず、あんたもよう知ってる人間と動物が住む人間界、ウチのような魔法が使える人、魔人だけが住む魔界、生物の魂を作り、管理することができる神様や天使が住む天界、死んだ肉体から出た魂が集まって、その魂を喰らう悪魔やら死神達が住む霊界、最後に、種族によってそれぞれ変わった能力をもった生物、妖精や精霊、ドラゴンなどの魔獣まで、魑魅魍魎ちみもつりょうが住む異界の5つの世界で出来てる。その5つの世界が別々に存在し

て、一部がつながりあつてこの世ができています」

「……まるで物語に出てくるファンタジーみたいだな。そんな話、信じられないな」

「そうかもしれないけど、全部ホンマの話や」

ありえないと思ひながらも、さっきまでの事があつたので、ちゃんと聞くことにした。

「それでいくと……この世界は人間界なわけだね？」

佳奈がニヤツと笑つた。

「チツチツチ。ハズレ。ざんねんや」

佳奈は人差し指を左右に振つて、楽しそうにしていた。

「この世界はな、
魔界やねん！！」

！？

「え！？魔界？でも、魔法なんてお前……」

「かー！ーな！ー！！」

佳奈にきつく睨まれた。

そんなに名前で呼ばれたいのだろうか……？よくわからない女だ。

「……佳奈、が使つてるのを見るまで見たことがなかったよ？それに、この世界には動物がいるじゃないか。お前……じゃなくて、佳奈の話だと動物は人間界にいるんだろ？」

「そうやねん。それが問題やねん。この世界の人はみんな魔法が使えるはずやねんけどな、でも、ある魔法使いにちよくつと、記憶をいじられて、世界全体にババァンと幻術を使われて、人間界みたいな世界になつてるから、みんな自分が人間やつて思い込んでしまつてんねん。動物については、あれは魔人が変身してんねん……」

佳奈は笑ひながら話したが、その表情はぎこちなく、少し悲しそうだった。

「魔人が変身つて、佳奈の様にか？？」

「ウチとはちよつと違う。ウチは父ちゃんに守られて、何とか逃げ切れて記憶を消されんで済んだけど、ウチのほかの動物になつてる魔人はその悪い魔人に抵抗した人たちで、みんな記憶を変えられて、

自分が動物やと思ってる。ウチは怪我しながらもなんとか逃げれて、隠れるために自分から動物になったはええけど、首輪の機械の電源いれんの忘れてて、動物のままうるうるしてたんや。動物の状態やったら声が出されへんし文字も書かれへんから魔法も使えへんで傷を治すこともできへんし、困ってるところにあんたが現れたんや」
偶然……だったのか。

自分が選ばれたなんて、そんなことを思っていたわけではないが、少しがっかりした。

「そうか……って、ちょっと待て！！それが本当だったら、もしかして、僕も魔法を使えるのか!？」

「ん？魔法には、理解と音や文字がないとつかわれへんから、魔法の記憶がない今のあんたには使われへんけどな。多分……使えんのちゃうか」

「まじか！！すげえ、記憶が戻れば使えるんだよな??どうやってたら記憶が戻るんだ?なあ、教えてくれよ、なあ」

僕は飛び起き佳奈の肩を激しく揺らした。

「あ~~~~、もう、やかましいねん!!ちゃんと教えてるから、黙るとき。口で話すのめんどくさいわ。ちょっと動かんといてや」

「え……」

佳奈が僕に顔を近づけてきた。

「な、な!？」

二人のおでこがついた。僕は恥ずかしくなり、顔が赤くなった。

その瞬間、色々な言葉が頭の中に入って来た。

『安心し、テレパス精神遠隔通信系の能力の一つや。それで、記憶を取り戻す方法はただ一つ、記憶を変えた魔人、ガイを魔法が使えへん状態にさせることや。難しいことはない、あの魔人、みんなに魔法かけたのと、ずっと世界に幻術を使ってるんでもう魔力がほとんどないし、アイツのいる場所はもうわかってんねん。だから、ウチとあんたが協力すれば倒せんこともない相手や』

(倒せないこともないって……じゃあ、お前の家に出て来たあいつ

はなんだつたんだよ)

『やっぱおつたんか？ナイフ持ったやつ？そいつはなあ、その魔人、ガイってやつが操ってて唯一記憶を持つてるウチの事狙ってんねん。ウチに傷を負わせたのもそいつや。でも、ただ操られてるだけやから魔法は使われへん。それに、ガイも人を一人操るのが精いっぱいってところやろ。だから大丈夫や。ウチと一緒に退治にいこ』

なんか無茶苦茶なことに巻き込まれた気がする。

(僕に倒せるのか？魔法も使えない僕に)

『大丈夫や。ウチもおる。時間がたつたら余計アイツの魔力が回復するから、出発は早い方がええやろ。まあでも、あんたも熱があるみたいやし……明日や、明日の夕方に出発する。それまでに熱を治し』

(こいつ、むちゃくちゃなことを言ってるやがる。僕が魔人を倒しに行く??あゝ、やばい、頭がくらくらしてきた。)

『ホンマに弱いやつぢやな。今はおとなしく寝とき』

そう頭に伝わってきたと思ったら、佳奈がいきなり頭突きをしてきた。僕は強制的に深い眠りにつかされた。

09 真実ワールド（後書き）

今日はいつもの1.5倍です。増量です!!

今回の話は、説明が多くなっちゃいました。

すみません。説明ヘタですみません。

わからないようでしたら、感想で言ってください。

書き換えますんで

感想なども、よろしくお願いします!!

10 戦闘オペレーション

「ねえねえ、はやくおきて〜」

「……………んん……………」

「はよ起きんと、ウチが、うふふ、やさしく起こして、あ・げ・る」

僕は薄目を開けた。佳奈の顔が近づいてくる。そして、僕の鼻に、佳奈の鼻が当たる。

佳奈の息を肌で感じ、長い髪からシャンプーのいい香りがした。

(な、何する気だ??ま、まさか、キ、キ、……………!?)

緊張しながら、寝たふりを続けた。テンションは最高潮だった。

「うふふ〜〜」

もう、後1?くらいしかない!!

「……………どっか〜〜ん!!」

パチンツ!!

「!?!」

僕は思いつ切りほつぺたを平手で叩かれた。

予想外の出来事にびっくりして一瞬ぼーっとしてしまっていた。今まで考えていたことが恥ずかしい。

「な、なにすんだよ!!」

叩かれたことへの怒りというよりは、恥ずかしさを誤魔化すために怒った。

「目覚ましビンタや〜。目〜さめたやろ〜」

どこの常識だと目覚ましにいきなりビンタをするんだ!?

大体、僕とお前は一昨日会ったばかりだろうが!!

「だからって、いきなりビンタはないだろ」

「なんや〜、あんたが妄想してみたいに、チュ〜したればよかつたんか??」

……
この瞬間、少しの間、僕の世界の音が消えた。

(あ……。忘れてた……。)

僕の顔が真っ赤に染まる。穴があったら隠りたいとはこのことだ。

「な、だから、人の心を勝手に見るな!!」

「ホンマやらしいやつちゃん〜あんたは。息も荒くなつてたし〜」

「うるせえよ!」

「なんやその態度は?ずっと看病したつてんで〜」

よく見ると、僕は布団の上で寝ており、服装は、昨日寝た時とは変わっていた。

おでこに絞り立てのタオルが乗っている。

本当に看病してくれていたのかもしれない。

「……だから、ウチらは一夜をともしたつてことやで」

「そうだね〜つて、はあ!？」

「その言い方やめろよ!!」 うう……、あ、ありがとな」

「応礼は言っておく。その辺のマナーは大切だからな。」

「別にかまへんつて。ウチらの仲やないか〜」

「一昨日会つたばかりだけどな。 実は、いいやつなのか

もな、佳奈……」

「ふふ。ついでに言うと、着替えさせたんも、タオルもあんたの妹

ちゃんがやつたんやけどな」

「お前何もしてねえじゃねえか!!」

結局、こいつはそういうやつだった。

(前言撤回だ。佳奈は僕に悪いことを持つてくる悪魔なんだ!!全然

いい奴なんかじゃない!!)

「何言つてんねん。ウチがそばにいる。それが一番の薬やないか〜」

「」

佳奈は笑いながらそう言った。

こんな事を本気で思っているのだとしたら、頭がいかれてやがる。

どうかしてるぜ!!

コイツは自信過剰なのだろう。まあ、確かに外見はすごくきれいだけど、内面は荒んでいる。

荒地だ。心の大地は乾涸びて、砂漠が広がっている。オアシスなんてひとつも見当たらない。

(コイツと一緒にいると、調子が狂う……)

人生最悪の目覚めを経験した後、時計を見ると、日曜日の夕方、出発の日になっていた。(別にまだいくとは言っていないが)

すると、いきなり、佳奈が手を額に当ててきた。

「熱はないみたいやな。じゃあ、ガイを倒しに行くで〜!!」

「オ〜」と、言えるようなテンションではない。病み上がりで、正直まだ寝ていたいし頭も痛い(頭突きをされたせいかもしれない)。

「はあ〜、本当に僕たちだけで大丈夫なのか？他の人も連れて行った方がいいじゃねえか？」

そう。別に二人だけで行く必要はないと思う。

敵がそれだけすごいことをするような相手なのだとしたら、もっとたくさん的人数を連れて行った方が無難だと思う。

「それはあかんねん。奴の能力の幻術は大勢相手の方が効果を発揮するものやねん」

佳奈が言うには、幻覚で、どれが本物のガイかわからなくなり、仲間同士の戦いが始まるのだとか。

そのせいで、佳奈の親達がやられたらしい。

「でも、もう少しだけでも連れて行っていいんじゃないか」

僕は、やられるのは嫌だし、痛いのも嫌いだ。できるだけ自分に害が及ばない方向で考えたい。

「それも考えたんやけど、他の人も一緒に行つて、その人が操られたらどうもできへんやろ」

佳奈は昨日とは違い、動きやすそうな服装をしていた。だが、色はやっぱ黒だった。

「でも、それは僕たち二人で行つても一緒なんじゃないのか？」

それとも、僕たちには操られないための秘策でもあるのだろうか？

「そんなことはない。ウチは3秒後までやったら予知ができるから、フレイグエーション気を付けていれば操られることはないし、もしあんたが操られても、ウチはあんたを本気でなぐれるさかいな」
そんなことを満面の笑みで言われた。

.....

(な、なんてやつだ。鬼だ。鬼畜だ!!心のない化け物だ!!)

「僕が操られないようにはできないのか!？」

「ごめんなあ。ウチの魔法はESP、つまり、超感覚的知覚が基本だからそんな魔法は使われへんねん。テレパス精神遠隔通信系の能力やつたらだいぶ使えんねんけどな。まあ、大丈夫や。操られたら、殴って目え覚まさせてやるからな。」

すぐくうれしそうな顔をしていた。佳奈のこんなにうれしそうな顔は見たことがなかった。

まるで、僕を殴りたくて殴りたくてうずうずしているようだった。

(くそつたれ!!)

「そんなに心配やつたら、今、確認の為に本気で殴ったるか?」
なんてことを言い出すんだ!?

冗談だと思いたいが、違うのだろう。腕を回して、慣らしている。やる気満々だな、おい。

コイツ、現れたときは真っ白な天使のような美しさで誤解させられたが、今ならわかる。佳奈の心の中は、今着ている服のように真っ黒だ。

天使なんかじゃない、墮天使だ!!サタンだ!!

コイツ……本当に

(性格悪!!)

「誰が性格悪いねん!!」

「ぐはあつ」

佳奈の右ストレートがきれいに僕の左の頬にクリーンヒットした。マジで殴りやがった。

戦いに行く前から殴られるなんて……

細くて女の子らしい身体の割に、佳奈のパンチは結構痛かった。なかなかやりやがる。

仕返しに殴り返そうとしたが、やっぱりよけられた。

「遊んでる場合とちゃうねん。はよ行くで。」

先に殴ってきたのはお前だろとは言わなかった。

言ったらどうなることか、想像もできない。

「ちよつとまで。僕は魔法の事が良くわからないからちゃんと教えてくれ。お前の魔法の超感覚なんたらつてなんなんだ？」

そつだ。ちゃんと聞いておかないと、苦労するのは僕なんだからな。

「超感覚的知覚や。うゝん……簡単に言えば、ウチはエスパーやな。つまり超能力者や」

そう言つて佳奈は話し始めた。

「魔人にも種類があつてなあ、陰陽師とか呪術師とか、まあそんなんに分類できへんような変わったものまである。超能力者もその中の一つや」

それなら僕はどんな能力だつたんだらう？

すごい能力だつたらいいなあ。

「その超能力者の中でも、普通の感覚器による知覚を超えた者をエスパー、サイコキネシスやレポート、パイロキネシス発火能力なんかを使う念能力者の二つにわけられるんや。ウチはその中の前者、予知、透視、テレパシー、サイコメトリーを使うエスパーなんや。だから、戦うのには向いてへん。まあ、多少は他の能力も使えんねんけどな」

うゝん……。専門用語のせいでよくわからなくなつてきた。

「サイコメトリーってなんだ？」

「まあ、簡単に言えば、物に残る残留思念を読み取る能力や。いつ、誰がそれを触つた……とか」

警察の捜査とかで使えそつだな。

「へえ、じゃあ、今から戦いに行くやつはなんなんだ？」

「うゝん、多分、大きく言えば幻術師やるな」

「幻術師??」

「うん。幻術師って言うのは、光術や催眠術を使って相手に幻覚を見せる能力やな。それ自体にはあまり攻撃力は無いねんけど、こっちから攻撃するには厄介やな。見えるものを信じられへんからなあ。さっきも言ったように敵やと思っただけで攻撃したら味方やったってこともあるんや」

「そんなことができるのか!? なあ……、幻術ってすごく強いんじゃないのか?」

勝ち目がない気がする。

それどころか、相手に触れることすら難しいんじゃないか?

「それより、今みんなが記憶を失ってるんも、人が操られてるんも、全部催眠術のせいやからなあ。ウチらには幻術よりも催眠術のほうが厄介かもしれへんわ」
もつと厄介じゃねえか。

「そんなことが出来る相手に勝てるのか?」

もう諦めようぜ。と、言いたかった。

そんな奴と戦うより、このまま普通に生きて、魔法がない世界で生活するのも悪くないような気がする。

まあ、言わないけど……

「まあ、大丈夫やろ。気をつけなあかんのは、幻術は光学とか音響学なんかの物理学や催眠術の為の心理学とかいろんなことを考えてやらないと効果がないねん。それを世界全体にかけてる。つまり、相手はめっちゃ頭のいい天才やっただけやな」

「そんなやつ、余計勝てねえじゃねえかよ」

佳奈がニヤリと口元を動かす。

「頭いいやつが戦いが強いとはかぎりゃんやろ」

「そりゃそうだけど……」

「奴はずっと勉強ができて天才と言われ続けたやつやねん。勉強面だけはな。周りからは色々言われてたみたいやけど……」
何か含みのある言い方だった。

「それって、どういう……??」

「アイツはもともとあんまり魔力が強くないねん。だからその分、天才と言われるほどの頭の良さでカバーしてる。だからこそ、アイツにやったら勝てるで」

この自信……、何か秘策でもあるのだろうか……??

「もうええやる。じゃあ行くで……」

ここで言葉が途切れた。

「えっと……そういえば、まだ名前を聞いてなかったな」

「僕の名前？僕の名前は日月火水たちもりひすい」

「なんか曜日みたいな名前やなあ。じゃあ、ひすいって呼ぶで」

「お、おう。」

「ほな、いくで、ひすい」

いきなりなれなれしい奴だなあとは思ったが、もう散々色々なことがあったので、気にもならなかった。

僕たちは、妹にばれないようにこそこそと家から出て行く。

この先、どんなことが待ち構えているのか、僕には全く予想もできなかった。

11 最大ミスメイク

夕日に照らされて真っ赤に染まる道を僕と佳奈は歩き続けた。

僕は佳奈に無理やり着せられた黒いジャージの上下（佳奈とお揃い）という服装が恥ずかしくすぎて、少しの間顔を真っ赤にしていた。

必死に違う服を着ようとしたが、その抵抗も虚しく、殴られ、怒鳴られ、そして今に至る。

僕がそれを着たとき、すごく満足そうな顔でうんうんと頷きながら早く行こうと急かしてきた。

いったい何の罰ゲームだ？僕が一体何をしたっていうんだ？

いいや何もしていない。ただの気まぐれなのだろう。

まったく付き合わされている身にもなってみてほしい。

こんな姿、に見られたら……。

最初はそんなことを思いながら歩いていたが、先日、佳奈の家に行った時とは違い、佳奈がいろいろしゃべりかけてきた。

（もっとも、その時佳奈はネコで怪我をしていたわけだが。）

実は佳奈はすごくおしゃべりなんじゃないかと思う。これは大阪人の血なのだろうか？

というか、佳奈は大阪生まれなのだろうか？

話している内容は、戦うときは相手の目を見るだとか。魔法にもいろいろ種類があるとか。魂の話とか。

「魔法が使えるかどうかは、魂で決まるんや」

佳奈が歩く足を止めずに言う。

「魂？？？どういうこと？？」

魂と言われても、昔は肉体に魂が宿っていると考えられていたことしか僕は知らない。

「天界の住人が生物の魂を操り、管理することができるっていうのは言ったやろ？」

「う、うん。でも、魂を管理するってどういうこと？」

「神様はな、生まれてくる肉体に入る魂を作ることができんねや」
「魂を!?!」

「そうや。魂がないと、肉体が生まれてきても動かへん。つまり、死んだ状態で生まれるわけや。そこで神様が魂を作るって入れてあげんねん」

「神様が??!」

「生物が生まれてくる時、親からは肉体をもらい、天使から魂をもらうねん」

現実的ではないにしろ、言っていることはなんとなくわかった。

だがそれが本当だとしたら神様はとんだお人好し野郎だ。

佳奈が淡々とした調子で話を続ける。

「へえ、でも、それと魔法が使えるのどう関係があるんだ??!」

「それがあんねや。神様が魂を作る、その作った時にはどの世界の魂が決められて、それぞれの能力を持った魂が作られるわけや。つまり、人間界の魂、魔界の魂、天界の魂、霊界の魂、異界の魂がつかられて、その魂自体に力が備わってんねん。肉体によって能力は多少変わるけど、魂が入ればそれ相応の肉体に変わるから、あまりかわれへん」

佳奈はさらつと流れるように言った。

（なんか、よくわからなくなってきた。魂に力が入ってる??多分、才能とかそういう話なんだろう）

「えつと。ってことは、魔界の魔人が魔法を使えるのは魔界の魂を神様からもらったからっていうわけだね?」

「そういうことや。物わかりが速くてええわ。で、神様はその魂を天使に渡して、その天使が生物まで届けんねんけど……時々どんくさい天使がおって、魂を入れる世界を間違えんねや」

どの世界にもドジッ子はいるものだ。

「それって……この魔界にも、人間界の魂を持った人がいるかもしれないってこと?」

「まあそういうことやな。逆に人間界にも魔界の魂が行くことが

ある。陰陽師や忍者とかは聞いたことがあるやろ?? あんなんはその例や。忍者なんて、人間の肉体を究極まで鍛えて、魔界の魂も究極まで鍛えてるから体術も忍術も備わって、暗殺のプロになれたってわけや」

「忍術って、魔法だったんだ!!」

どつりで昔、忍術をしようとしてもできなかったわけだ。……まあ、これも作られた記憶なんだろうけど。

「だからやなあ、天使が間違っつて、ひすいに人間界の魂を入れてたら、肉体のおかげでちょびつとだけは魔法が使えるかもしれんけど、ほとんど魔法が使われへんつてことになるかもしれんわ」

「ええ~~~~~!!」

ショックなことを聞いてしまった。

「まあ、天使もそんなに間違えへんし、普通はちゃんとした世界にいくねんで」

「そうなんだ……」

僕はとてつもない不安に襲われた。

（僕ってハズレが1つしか入ってないくじ引きでハズレを引き当てる人だからなあ。ある意味すごい運だよ）

戦いに行く足取りが少し重くなった。

（どうせ魔法が使えないんだつたら、今のままにしてみんな使えない方がいいんじゃないかな?）

「ひすい!! お前は何を考えてんねん!! アホとちゃうか??」

「ご、ごめんなさい。つい出来心で……」

冷たい風が吹き抜ける。だんだん空の赤色が暗くなってきた。月が見えない。今日は新月の様だ。

（このまま時間がたつと真っ暗になるな。早く行かないと）

そこで、僕はずっと気になっていることを聞いてみた。

「……気になつてたことがあるんだけど、一つ聞いていいか??」

「ん? スリーサイズと体重以外ならべつにええで」

佳奈の顔がにやついている。

今からこの世界全体に幻術をかけ続けるようなすごい魔人と戦いに
行くというのに、緊張感のない奴だ。

スリーサイズ……少し聞いてみたい気がする
いないや、そ
んな話ではない。

「誰が聞くかそんなこと……あの夜に僕が取ってきたカバン、
何が入ってたんだ？」

「なんや〜？乙女の持ち物を聞いてどうする気や、このエロやろう
そのカバンを取りに行かせたのはお前だろ！！
佳奈の顔に笑顔が広がっている。

どこが乙女だ、どこが！！

「そんなんじゃねえよ！！あんだだけ、苦労して取らせただからす
ごい武器とか入ってたのかなあって思ってたさ」

「武器？そんなん入ってへんで」

武器が入っていないのだとしたら、回復薬か、そんなものだろうか。
あの時佳奈は怪我をしていたのだからそれなら納得する。だが違う、
何か嫌な予感がする。

「そうなのか？じゃあ、何を入れてたんだ？」

「何って、フツ に着替えとか、乙女に必要なものばかりやで」

「……？？着替えて？？？」

「着替えが何かも知らんのか？それとも、ウチにやらしいこと言
わせようとしてるんか？？ホンマにエッチやな〜」

佳奈を見ると、ニヤニヤとした憎らしい顔で僕を見ている。

コイツの頭はこんなことしか考えられないのか。どっちがエロ野郎
だ！！
いい勝負じゃないか！！

つて、ちょっと待て、今なんて……

……

カバンには着替えぐらいしか入ってないって？？

遅れて、怒りが込み上げてきた。

「そんなものを俺に取りに行かせたのか！？あんな危険を冒させて
！！」

「うん??なにを怒ってんのひすいっち」

「そりゃ怒るだろ!!殺されそうになっただぞ!?それなのに手に入れたものが着替えて……」

泣きたくなってきた……。

「なんや、ウチに外で変身させて服も無く真っ裸になったらよかつたって言いたいんか??うわっ、やらしく。ほんまもんの変態やわ」

「だからそんなんじゃないよ!!店で買えばよかつたじゃないか」

「ひすいっちは女性用下着を店で買えんのか?それこそ変態やで」
「う、うう~~~~~」

僕は怒るといふよりも呆れてしまつて何も言えない状態だった。

(負けた。完敗だ。口で戦つて勝てるような相手じゃない。その上、考えていることはばれてるって、どうしようもない。)

僕は佳奈と戦つても勝てないことを自覚した。悔しいが事実だった。
「つと、そんな話してる間についたで。ここや」

さっきまでのニヤニヤした顔から真面目な顔に切り替えた佳奈は立ち止まつて、目の前にある家を指差した。広い家ではあるが、世界を動かしているやつが住むような家には見えない。

「こんな、普通の一軒家が、そのガイつてやつの家なのか??」

「普通つて、見た目に騙されたらあかん。幻術がかけられてあるつて言つたやろ?カモフラージュや」

「ふ~~~~ん……で、どうやって入るの??」

僕が尋ねると、佳奈はニヤツとニヒルな笑いを浮かべた。

「こうすんねんや!!」

佳奈が何かを投げた。

ドゥ~~~~~ン!!!!!!

大きな音とともに目の前が爆発し、美しく光が舞う。どうやら佳奈が爆弾のようなものを使つたらしい。

「ウチの特製、花火爆弾や」

「おまつ、こんなもん使つんだつたら先に言つとけよ!!」

「堪忍や〜。ウチもこれ使うのはだいぶ久しぶりやったから、うまくいくかわからんかってん。もし爆発させるって言つといて、しよぼかつたらウチめっちゃ恥ずかしいやん〜」

佳奈は爆発したことに満足したのか、大笑いしていた。

「恥ずかしさより、人の身を心配しろ!!!」

「そんなことで怪我するよりましだろ!!!で、今のなんだよ!!!」

「なははは。あれはな、ウチいきなり大きい魔力出されへんから、今日の朝の間にテニスボールに魔力を込めといてん。それに、ウチの発火能力パイロキネシスで発火させて爆発させたつちゆうわけや。どや、すごいやろ」

（何？発火能力？？こんなの使えるのかよ……）

「……、佳奈、お前そんな力使えるんだつたら一人で勝てるんじゃねえのか??」

「それがやなあ〜、前にも言ったけど、ウチの能力は超感覚的知覚が基本やねん。だから、今の発火能力パイロキネシスみたいなPK（サイコキネシス）はほとんど使われへんし、それに〜、……あははあ〜」

「な、なんだよ」

おかしな笑い。この後の言葉は聞きたくなかった。

「今の魔法で、魔力ほとんど使っちゃった……てへっ」

佳奈はかわいく笑って見せた。腹が立つたが、ちよつとだけかわいかったせいで不覚にもドキッとしてしまった。

「てへっ、じゃねえよ!!!どうすんだよ。魔法なしでガイってやつと戦うのかよ!!!」

「まあ、アイツもあんまり魔法使われへんやろうし〜、おあいこつてもんやろ」

「適当だなあ〜」

だんだん煙が薄れてきて、家が見え始めた。あれだけの爆発が起きたというのに家のドアが吹っ飛ぶ、ぐらいしか壊れていない。

（見た目はすぐ壊れそうなのに、すげえ耐久力!!!）

やはり、普通の家ではないのだろう。今の爆発でそれは実証された。

「うん、まあこんなもんやる。ウチ爆発は苦手やしな。」

（これ、勝ち目ないんじゃないか？……僕、ここで死ぬのかなあ。それだったら、この前の雨の日に奏に告白しとけばよかったなあ）

このとき、僕は後で死ぬほど公開するようなことをしでかしてしまっていた。

「ひすいっちやっぱり、あの子のことが好きやったんや〜」

「な、な、心読まれてる！！」

忘れてた！！

やばい、こんなこと佳奈に知られてしまったら……。絶望だ〜。

「嘘！！今の嘘だから！！別に好きな人なんていないから！！」

「ふ〜ん。好きな人なんておれへんねや〜。へえ〜」

いつも以上にニヤニヤした顔で僕を見てくる。

（意地悪な奴だ。すごく嫌な奴だ。）

「嫌な奴？？そんなことウチに言ってもええの？」

（やばい、弱みをつかまれてしまった……。これで僕は一生コイツの奴隷になっちゃうのか〜！！）

「へっへっへ〜。この話はまた後にしとこっか〜。今はガイを倒すことだけ考えよ」

「お、……おう」

ウキウキした様子で家に入ろうとしている佳奈の後ろをトボトボとついていく。

もう死んでしまいたいとさえ思ってしまうほどに僕のテンションはがた落ちだった。

僕が家に入ろうとしたとき、佳奈は立ち止まり、今までの雰囲気からガラッと変わった。

「どうしたんだ、佳奈？？はやく……」

「アカン！！」

そう言っつて、佳奈がいきなり飛びついてきて、僕は押し倒された。

「な、なにするんだよ!!」

「アンタがおったとこ見てみ」

そこには、たくさんのナイフが地面に突き刺さっていた。僕の脳裏にあの時の事が思い出される。

恐怖で全身から汗が出る。

「ナイフ野郎がきよったんや。コイツに会わんとガイを倒したかってんけどな」

家の中に黒いコートを着た、長身の男が立っていた。

11 最大ミスイク（後書き）

そろそろ、第一章の終わりに近づいてきています。

読んでくださっているみなさん。
楽しんでいってくださいね！！

12 始まりサバイバル

突然現れた男のコートの中からはたくさんナイフが、ほとんど見えなくなつた夕日に照らされて光っている。

「あ、アイツはこの前の!!」

前に会つたときは真つ暗だったのでこれが初めてちゃんと姿を見たことになる。

不気味だ。

顔が見えないほど深くフードをかぶっている。あれで前が見えるのだろうか……。

「厄介な奴が現れたなあ」

「なあ!! どうするんだよ。魔法で何かできないのか??」

「そうだ、さっきの爆発するやつをやつてくれれば。」

「だから、魔力ほとんど使つちやつた言うたやろ。それに、こいつは物理的な攻撃しかしてこえへんから、ウチの知識も役に立たんし……一番の問題は、こいつは操られてるだけって事や。下手に攻撃できへん。とりあえず、ナイフが無くなるまで避けて!!」

「それって、何もできないってことか?? なんだよそれ!!」

「大丈夫や。人を操るのって難しいから、ナイフの命中率も悪いはずや」

僕たちに打つ手はなかった。

男はナイフを投げ続け、僕たちはそれをひたすら避けた。数分たったが、まだ一度も当たっていない。

太陽が完全に隠れて、暗くなってくる。鈍い青色の空の中、雲だけがまだ赤色をしていてすごく不気味だ。

だんだん闇が迫ってくる中、僕たちは必死によける。

暗くなつてきたせいでナイフが見えにくくなってくる。地面に散らばつたナイフも、僕たちに行く手を阻む。

「くそつ、全然見えへんようになってきた。そろそろ刺さるかもな

笑いごとのように佳奈が言った。

今日は悪いことに新月で、月の光が全くない。もうすぐ太陽の光もなくなり、真っ暗の闇が広がるだろう。

「佳奈は隠れてる!!」

「ああ？何かっこつけてんねん。かっこつけて死んでも全然うれしくないで」

「これだけ暗くなったらお前ナイフ見えねえだろ!!早く隠れる」

「暗くて見えへんのはあんたも一緒やる」

「僕は昔から目がよくて、暗闇でも見えるんだ」

光のない真っ暗な中でも多少は見える。僕の目はそれほど良かった。確かに普通では信じられないかもしれないかもしれない。目がいいというだけでは説明がつかないだろう。でもそうなのだ。

「目がいいって、それ……」

「いいから隠れてるよ。今の間に休んで魔力を回復させておけ!!」

「……、わかった。怪我せんときゃ」

「おう!!」

ナイフを投げってくる相手と戦って怪我しないわけがないが、大きくうなずいた。

かっこいいことを言ってみたものの、勝てる気はしない。いくらナイフが見えたって、そろそろ体力的にも精神的にもつらくなってくる。

とりあえず、佳奈の魔力が回復するか、男のナイフが無くなるかするまで逃げようと思った。

右から、左からと、たくさんナイフが飛んでくる。

だが、まだよけられる。それより、まだ何かいるような気が……

あたりは真っ暗になっていた。ぼんやりと見える地面に突き刺さったナイフはざつと数えても百本以上はある。

(どれだけでもってんだよ!!って、さつきより、奴の動きが速くな

つてきた気がする……これって、ナイフが残り少ないってことか？
？でも、これ以上速くなられたら、さすがによけきれねえ。どうすれば奴に攻撃できるんだ……）
その後もナイフを何とかかわし、逃げ回る。さすがに疲れてきた。
だが、男は息一つ上げてない。
この男には疲れるというものがないのだろう。長期戦になるとこちらが不利だ。何とか早いうちに倒さないと。
突然、男の動きが急に変わった。近づいてきて、ナイフを振り回し始めたのだ。

「ナイフが無くなったのか？？」

男は機械的にナイフを振り回した。その動きはぎこちなく、接近戦はあまり得意じゃないようだった。
僕はあることに気付いた。

（そうか！！コイツを操っている奴は机に向かってばっかりだったはず……これならいける！！）

僕は逃げるのをやめ、男に向かって走り出した。

「だああああ~~~~！！！！」

男はナイフを振り下ろした。が、何とかそれを横にかわした。

ドン！！！！

僕はそのままの勢いで男に体当たりをした。男は吹っ飛び、倒れた。そこに、本気の踵落としかかとを腹にくらわせた。

「ぐはあっ」

男は倒れたままで、動かなかった。

そう、家の中で勉強だけをしてきたような人間が、喧嘩になれているはずがない。

ましてや、ナイフを使った戦い方を知っているわけがないんだ。それに気づいてしまえばこっちのモンだ。

それでも僕はトモと毎日のように戦っていたんだ。（もっとも、トモにはそのつもりはないんだろうが）

「俺の恋人に手を出すんじゃないやねえよ!!」

隣に現れた人がそう叫んだ。背が高くがっちりとした身体、短い髪、汗のおいがする。

(俺の恋人??俺?あ、お、お前)

「大丈夫か、たちもりくん?」

「トモ!!お前、何でこんなところに!?!」

目の前に現れたのは上下ジャージといった服装の幼馴染のトモだった。

「ん?君が困ったときにはいつでも俺は現れるよ(キリッ)」

突っ込む気にならなかったわけじゃない。いつもなら気持ち悪いと思っただが、今日はかつこよかった。

「……」

「何黙ってたんだよ。ランニングだよランニング。夜に走ってたなら、女の人の声で『火水ひすい!!』って聞こえたから、これは日月たちもりがピンチなんじゃないかと思ってな。」

「トモ……」

どんなことを言ったとしても、こいつは俺の事を考えてくれる親友なんだと実感した。

「チャンスだ!!ここでかつこいいところを見せたら、日月たちもりも俺にメロメロになるんじゃないかって思って、ピンチになるまで様子を窺ってたんだ」

「……お前、やっぱり最低だ」

さっきまでかつこいいと思っていたが、最後の言葉でかつこよさのかけらもなくなった。

こんなやつ親友じゃない、知人だ。

「後で、あの女との関係について話してもらおうからな」

トモは後ろを指差し、すごく心配そうな顔で僕を見た。
後ろで佳奈がクスクスと笑っている。

「う、うぐぐぐ」

トモが突き飛ばした男が再び起き上がった。そして、すぐに僕たち

に飛び掛かってくる。その手にはナイフが握られていた。

「日月、後ろにさがれ。後は俺が何とかするから……え！」

トモがかっこよく決めて後ろを見ると、もうすでに後ろには誰もいない。

「もうさがってるから、ささっと倒しちゃって」

「早！！隠れるの早！！おかしいだろ！！もうちょっと心配してくれよ……。まあ、それだけ俺の力が認められてるってことにしとくぜ」

トモが男の方を見た。男がナイフを振り回しながらトモに突撃してきている。

よく考えると、光がほとんどないこんな暗闇で、トモは奴が見えているのか??

そんなことを心配しているのもつかの間、心配していたことは現実となる。

男のナイフが、トモの腹に刺さる。

「トモ！！」

僕は叫んだ。そして駆け出そうとした瞬間、

「来るな！！」

そうトモに言われた。

血が出ていない??よく見ると、ナイフも少ししか刺さっていない。いくら体を鍛えているからと言ってそんなことがあり得るのか!?! 次の瞬間には男の手にはナイフがなかった。ナイフは、トモが持っていた。

「どらああああ！！！！！！」

トモが何かをしたのはわかるが、速すぎて何も見えなかった。わかることは男が倒れているという結果だけだった。

トモがニヤツと笑う。

「兄ちゃん、アカン！！そいつは操られてるだけやから、そいつの意識が飛んだってゾンビのように何回でも起き上がってくるで！！」
「それも、見てたよ！！」

そう言ったと同時にトモは男に抱きついた。

「トモ！！こんな時にお前、何やってんだ」

「ん？焼いてるのか??」

トモの手が男の体に絡みつく。

ここまでのホモだったとは思っていなかった。正直、引くぞ！！

「違うよ！！そんなことしてる場合じゃないだろっついていてるんだよ！！」

「勘違いするなよ。今からやろうとしてるのは簡単に言えば締め技だ」

「締め技??」

「ああ。プロレスとかで使われる技だ。っといっても、俺が使うのはそんな甘つちよろいものじゃないけどな」

さっきまで暴れていた男が全く動かなくなった。というより、動けなくなった。

(こいつ、本当に強い)

いつも僕には本当に手加減しているんだなと思った。

そして、トモに少し恐怖を感じた。

「トモ、こんな技、何で使えるんだ?」

「ふっふっふ。それは秘密だ。ついでに、格闘技の中で禁止されている技ならすべて極めているぜ」

どこで習ったんだよ、それ!!

「……。とりあえず、お礼を言うておくよ、ありがとう」

「何言っただよ。俺ら、愛し合った仲だろ。お礼なんていいよ。

それより、感謝のキスを……」

「やるか!!」

トモは男に締め技を使いながらも、余裕を見せていた。そういえば、トモはさつき刺されたはず。

「トモ、お腹は大丈夫なのか??」

「ああ、それなら心配ない。今身体につけている重りに刺さっただけだから」

よく見ると、体中に重りがつけてある。いったい何キロの重りをつけているのだろうか。

ここで、隠れていた佳奈が様子を見つつ出てきた。

「誰かわからんけど、兄ちゃんホンマ感謝やで。ありがとう」

佳奈が素直にお礼を言う。珍しいこともあるもんだ。

「いや、それより、君と日月とはどんな関係なんだ??夜中に歩いていて偶然会ってしまった友達か??それとも、久しぶりに遊びに来たいところか??」

トモの顔つきが変わった。戦っていた時よりも真剣な顔をしている。

(コイツ変態だ)。そんなことどうだっていいだろ)

佳奈はちらつとこつちを向いて右手でVサインをした。その表情は、これ以上ないというくらいゆるんでいて、ニヤニヤとしていた。これはまずい。

佳奈、変なこと言うなよ、頼むから!!

「ウチと火水ひすいの関係やって、そんなに聞きたいか??」

(やめろ、佳奈!!変なことを言うな!!トモのやつが何してくるかわかったもんじゃない)

「お前……日月の事を下の名前で呼び捨てに……俺の愛人になれなれしくしないでくれ」

いや、僕はトモの愛人じゃないよ!!

「へ〜愛人!?寝言は寝ていい!!気持ち悪い男やなあ。それに残念やなあ。火水ひすいにはウチがあるから、もしホンマやったら、あんたは遊ばれてるだけなんとちゃうか??」

(遊んでないし!!何勝手にわけわかんないこといつてんの!?)

「ふ、ふん。ばかばかしい。そんなわけがないだろ。俺たちは幼稚園のころから一緒に、永遠の愛を誓い合った仲間だからな!!だからお前は、日月たちむじとどんな関係なんだ!？」

(いつ誓ったよ、永遠の愛をいつ誓ったよ!!幼稚園の頃から気持ち悪かったよ、お前)

トモのようすがおかしい。明らかに動揺してイライラしている。そ

のせいで腕に力が入り、締められている男は泡を吹いている。

「そんなイライラせんとく。ウチらの関係??そうやなあ、強いて言うなら。一夜をともした関係かなあ。ウチの裸も見られてるし」

「な、なんだと……一夜をともした……しかも、裸も見た、だと!? ホントか!? たついもるいいい……!!」

舌が回っていない。はあはあと息が荒いのも少し気になる。答え方次第では僕の命が危ぶまれる。

「えっ!? 一夜をともしたっていうのは……まあ、一緒にいたってだけで。」

「妹から隠れるために火水の布団の中に入ってん。つ、ま、り、同じ布団で寝たってことや」

「お前、人が寝てる間にそんなこと!! で、でも、裸は見えてないよ!!」

その時、突然佳奈がおでこを付けてきた。それを見たトモは顔を真っ赤にして怒っている。

『ネコの時の、ウチの裸を見たやろ』

「確かに見たけど……それは!!……」

「日月!! 見たのか、裸を!! この女の言ってることが本当だといつかのか??」

トモの顔が明らかに青ざめて動揺を隠せないようだった。

「嘘ではない……けど、それは……」

「うっおおおおお!!……!!」

トモは闇に向かって吼えた。全身に力が入っていて、締め付けられている男の体がありえない形に曲がっている。

(もうやめてくれ……!!)

「おもしろいけど、これ以上いじるとその男が死んでまうわ。ホンマに、いじり甲斐のある男やで。……嘘や嘘。さっきまでは全部嘘……!!」

トモの動きがピタと止まり、佳奈のほうを見た。

「う、嘘？」

「そうや、ウチは兄ちゃんと火水の仲を壊すようなことするはずないやん」

いや、それはしてくれて結構なんだけど。

「だ、だよな〜。俺も最初からそうだと思ってたんだ。日月たちせじが、浮気するわけないだよ」

(浮気って、いつから俺はお前と付き合ってたんだよ!!)

「そうやそうや。っと、やばい。こんなことしてる間にメツチャ時間たってもうた!! ガイには今のことも知られてるやろうなあ。まあええか。アンタ、ウチらが戻るまでそいつ放したらあかんぞ」
「そういうなり佳奈は家に入っていった。慌てて僕も追いかける。」

「ありがとう。トモ!!」

「おうっ」

トモを暗闇に残して、僕は佳奈の後を追った。

13 見えないバトル（前書き）

長い間書かなくて申し訳ありませんでした。

この話もうクライマックスにちかづいていっています。
見てくださっている皆様、ありがとうございます。

13 見えないバトル

家の中はすべてが金色で眩しく光り輝き、目がチカチカする。外から見ると普通の家だったが、予想以上に……というか、普通ではありえないほど広く、家の中で迷子になりそうなほどだ。家と言うよりお城といったほうがいいだろう。いったいどういう仕組みなんだ？ 佳奈の後を追いかけたのだが、もう姿が見えない。

（佳奈は……どこへいった??）

見回すとドアが多すぎてどこに行ったのかわからない。

そのとき、大きな音が鳴り響いた。

ドゥーーーーーーン!!!!

……!??

爆発音のような音が鳴り響き、地面が大きく揺れる。

「キヤーーーーー」

「!??」

奥の部屋から大きな音と同時に佳奈の叫び声が聞こえた。

「佳奈!!!」

すぐに僕は走って声が聞こえたドアを開けた。

今いる部屋とは違い、暗く、白い煙に包まれている。

「あはは……ちょっと失敗してもうた」

目を凝らして良く見ると、佳奈は全身から血を流し、ぐったりと横に倒れていた。体が赤い、全身を火傷しているようだった。

「うっ……。まったく、今日は騒がしいね。なんだって言うんだい?」

部屋の奥から、筋肉質で大柄の男が妙に落ち着いた声で言う。部屋の中はボロボロになっているにもかかわらず、コイツには傷一つついていない。

「おい!!!佳奈に何をした?」

目の前の男をきつく睨み、出来るだけ低い声で威嚇するように言う

た。

「おいおい、そう怒るなよ。俺は何もしてないぜ。そいつが勝手に爆発したただけだ」

「そんなわけないだろ！」

「でもそうなんだよ。そいつがいきなり、爆弾を投げてきやがったから、自分の身を守るために反射した。そしたらそいつが爆発したっただけだ。自分の身も守れねえくせにそんなもん投げてるなって」
慎重に考えて行動する佳奈がそんなミスをするようには思えない。
やっぱり、コイツが何かしたんだろう。

目の前の男のまがましい雰囲気からして、コイツがガイなんだろう。でも、ガイってこんなに大きかったのか？

（大丈夫か？佳奈。）

佳奈がコクリとうなずいた。だが、立ち上がる事も出来ないようだ。
（僕が、何とかしないと……でも、魔法も使えない僕がどうやって……）

普通にやっても勝てない。しかし、僕には悩んでいる暇なんて無かった。

（とりあえず今は時間稼ぎをするしかない。今の音を聞いて誰かが助けてくれるかもしれない）

僕は男に話しかける。

「お前、何でこんな事をしてるんだ？」

「こんな事？簡単な事さ。俺は世界を動かす力を持っている。それなのに、みんな俺を認めない。どれだけ勉強して、優秀な成績を残しても、俺が天才である事を誰も認めない。認められるのは、単純に強い魔力を持っているバカだけだ。俺みたいな弱い魔力しか持っていないやつなんて相手にもされない。それどころか、頭脳でそれを補おうとする俺のことを頭のおかしい狂ったやつだという。だから、認めさせようとしてるだけだ！！弱い魔力でも、頭を使えば世界を動かせるってな！！」

ガイが気が狂い吠えるように言う。

(こいつ、説得できるような状態じゃない。となると、戦うしかねえか)

わかってたことだが、いざ戦うとなれば足が震えてくる。

『だめや、ひすい!! あんたが勝てるような相手とちやう』

頭の中で佳奈の声が聞こえた。ガイに顔を向けたまま心の中で思った。

(お、お前、おでこくつつけなくても話せるんじゃないか)

『そんなことより、無理や。アンタにはガイがどこにおるかもわからへんやろ?』

僕の目の前にガイはいる。

(どこにいるって、目の前にいるじゃねえか)

『それは幻術が作り出した幻影や。ホンマは今見えてるガイの後ろにある木、あれがガイや』

幻影の後ろの木をチラリと盗み見た。やっぱりただの木にしか見えない。

(な、何でそんな事がわかるんだ??)

『言つたやろ。ウチには超感覚的知覚があるって。さっき爆発するまでわからなかったけど、多分あいつもさっきの爆発でダメージを負ってるんや。だから、幻術が薄れて、ウチに見破られてしもうたつてわけや。だから、今やったら多分逃げられる。はよ逃げ!! そっせんとアンタ……』

(黙れ!!)

『なっ!?!』

テレパシーでは心の中で強く思うと、その思いも強く相手に伝わらしい。

(今逃げたって、顔見られてるしいつか倒しに来るだろ?)

『そりゃそっやけど……でも』

口もとが緩めて、優しく《思う》。

(お前が爆発させて相手は傷ついてんだろ? 今がチャンスじゃねえか。……それに、ちょっと考えがあるんだ。サポート、頼むな)

『えっ！？』

佳奈は驚いて何も言っていなかった。

(行くぞ……)

僕は覚悟を決め、しっかりと幻影のほうのガイを見る。そして、ゆつくりと近づいていく。

「もつと他のやり方があったんじゃないか?? お前は結局仕返しがしたかっただけだろ?」

「ふっ、仕返し? 違うね。これは罰なんだ。俺を陥れた罰をみんなで償っているんだ。連帯責任だよ」

「むちゃくちゃだ。そんな事で、佳奈をこんなぼろぼろにして……

俺は絶対許さない!!」

そうだ。誰も傷つけたくなんか無い!!

「何をかっこつけたことを。君は勘違いをしているよ。連帯責任だつて言つたら? 君も責任を負うんだよ!!」

「!!!」

周りにおいてあるものが宙に浮かぶ。本に棚、皿やナイフまである。それらが一斉に僕に向かって飛んできた。

(大丈夫だ。これは幻覚だろ)

『何してんねん!! はよ避け!!』

「!!!」

慌てて僕は避けたが、刃物が顔に当たり、少し切れる。

『アンタアホとちゃうか?? 見えるもんを信じたらあかんって言うたやろ?』

(だから、これは幻覚だつて……)

『あんたが見てるもんは全部幻覚や。やけど、見えてないもんが飛んでくる事があるってこと忘れんな!!』

幻覚の中に本物が隠れているかもしれないという事か。

いや、それだけじゃない。本物が空気に隠れているかもしれないんだ。

今見えるものが全く信用できなくなった。

(そ、そうか。ありがと)

『お礼は終ってから言い。それより、実際に飛んできてんのは、ちよつとだけやしあんまり速くない。だから、ウチが言うように避けて。それも、幻覚にだまされてるように見せながら避けてな!!』

(難しい事を言うな)。わかった。やってみるよ)

幻影のガイとの距離は約8m、その後ろの木、本当にガイがいるところまでの距離は幻影から2m弱。

「よく避けたねえ。でも、……次は必ず殺すよ!!」

再び、周りのものが宙に浮き、僕に向かって飛んでくる。

僕は佳奈の誘導を受けながら、ひたすら幻影を避け続けた。どれが本物かわからないため、佳奈の誘導に正確に従いながら移動する。たった10mぐらいなのになかなか近づけない。

幻覚まで避けないといけない為、余計動きづらい。だんだん息が上がつてきた。

「そろそろ、疲れてきたんじゃないのか??休んだらどうだ??まあ、その時には死んでるけどな。クフフフ」

ガイは勝ち誇ったような奇妙な笑みを浮かべ、僕の集中をそらそうとした。

(一応陸上部に入っていて良かったな。運動やってなかったらとっくの昔に倒れてやられてるよ)

『何しようもない事考えてんねん。なんか策があるんじゃないかなんか!!』

(ごめん、アイツに近づかないと意味がないんだよ)

『それならそうと先に言え!!ウチの魔力もあと少しや。さっさと片付けるで。じゃあ、合図してから3秒間、全部ウチの言うとおりに動いて』

(了解!!)

「どうした?返事もなしか?もう諦めて降参しろよ」

「うるさい!!いいかげん黙れよ!!」

僕は大声で叫んだ。宙に浮かんでいく物の動きがピタッと止まる。

……
……???

そう思ったが、包丁は僕の体をするりと通り抜けた。ガイから驚きの声が漏れる。

（よかった、後は、幻影の前に行つて……どうすればいいんだ？）
幻影の前までの2メートルを全速力で走り、目の前に少ししゃがんで入る。

（どうすればいいんだ？目の前にはガイがいる。でも、これは、幻影で、本物は後ろの木で……つて全然わかんね〜！！つて走つた勢いが止まんね〜！！！！）
そして、僕は跳んだ。何をすればいいのかわからず、思わず目の前のガイを避けようと跳んでしまった。

「……」

ガイは僕の体の中を通り抜ける。そして、すぐに、目の前に木が現れた。

（やばい、突っ込む！！）

ドン！！！！

僕は思いつきり木に体当たりをしてしまった。

（痛〜〜、くない。）

下を見ると、さっき通り抜けたはずの男が倒れていた。

だが、その男はさっきより一回りも小さい。

（そつだ、本物のガイは木になってたんだつた。早く、コイツを倒さねえと！）

僕は拳を大きく振り上げた。そのとき、頭の中に何かが流れてきた。

（な、なんだ！？頭が、痛い！！）

痛みに襲われ、僕はゆっくりと意識が遠のいていった。ガヤガヤと音がしているような気がする。

（結局、僕には何もできないんだ……）

13 見えないバトル（後書き）

交流する相手を募集していますので、どんどん話しかけてください。
では、まだ、続きます。

14 既視感アフター

「…………ガブツ」

目が覚めると、僕は耳をかまれていた。僕を馬乗りにしたネコ……ではなく、ネコ耳を付けた姉が優しく耳を甘噛みしていた。長くてくねくねした髪が、僕の顔にかかっている。なんか、いい香りがする。

(うっ、頭が痛い……、今どうしてるんだっけ?)

頭の中の記憶がぐるぐると駆け巡る。

意識が戻っていくにつれ、僕の感覚器官も正常に動き始めて……

「ツツ!?!い、いてえエエ~~~~!!!!ってうわ、白姉しろねえ!!なにしてんの?」

「ん?ひーちゃんにご褒美だよ!!」

僕は今、高二で思春期なわけで、血の繋がっていない姉にこんな事をされると色々困るわけで……

「ご、ご褒美!?!」

「そう、ご褒美。がんばったひーちゃんには、ギユウウってしてあげるね~~~~」

「うがっ」

魅力的で豊満な女性の体が僕に絡みつく。

(白姉の成長した身体が僕の身体にくっついて!!やわらかい感触がああああ~~~~!!しかも、やっぱり少し湿った髪からシャンプーのいい香りが。……って湿った髪!?ま、まさか、お風呂上りですか!!よくみたら、冬なのに長袖のシャツ一枚にズボンは……はいてない!?)

「ひーちゃん冷たくてきもち~~~~」

「な、なに言ってたんだよ!!」

(いや、こっちも気持ちいいけど、って、あれ??なんか懐かしい

ような気が……)

思春期の僕にとっては拷問のような誘惑をなんとか振り切ろうと自制心を保った。

「なんでもいいから、早くどいてよ!!」

「もう……。つれないなあ」

姉はそういつて、やっと僕の上からどいてくれた。僕の姉、日月白たちもりしろ雪は実際の姉ではない。本当は従姉なのだが、五年ほど前に親を亡くして、僕の親が養子として引き取ったのだ。姉とは従姉のころから仲が良くて、いつも世話を焼いて、僕にくつついてきた。姉になつてからはよりいつそう僕の身の回りのことを色々してくれる。今は大学2年で、白魔法の研究をしているようだ。学生でありながら魔導師隊(正しい魔法の道を導く隊、警察のようなもの)にも入っているエリートだ。

「えへへ〜」

(外ではしつかりしてるのに、家ではいつもこうなんだよなあ) 姉はふにやふにやした笑いを見せながら、僕のベットに座った。時計に目をやると、まだ、朝の四時だった。

(とりあえず、早く寝たい!!)

「こんな時間になんなんだよ」

「ごめんね、ひーちゃん。でも、ちゃんと言っておかないといけなかったから」

真面目な顔つきで、僕の目を見ていた。

「……………?何を?」

(昨日は姉と会った覚えはないんだけどなあ) 記憶をたどっていると、何かが引っかかった。

「昨日の事って覚えてる??昨日どこで何をしたか」

「昨日のこと??えつと……」

(たしか、昨日は佳奈と一緒に……つて、そうだ!!アイツを倒す前に僕は頭が痛くなつて意識が無くなつてしまったんだ!!)

「思い出したあ??昨日、急に全部思い出して、ガイのところに向

かつたらなぜか外ではトモ君が男に締め技をしているし、中でもひーちゃんがガイの上に倒れて気絶してて、びっくりしたんだからあゝ。何があったかわからなかったから、魔導師隊のESPエスパーの人たちにサイコメトリーで物に残る残留思念を読み取ってもらって、やっとひーちゃんがガイを倒してくれたってことがわかったのよ」

「僕がガイを倒した??で、でも僕はなにも……」

「なにもって、ガイに思いつきり体当たりしてたよね。ああゝゝ、すっごくかつこよかつたよあゝ」

「えっ、あれで気絶したのか??」

(ひよるひよるではあったけど、ここまでとは……ってか、こんなやつに世界が動かされてたのかよ)

「つため息をついて、再びベットに寝転がった。」

「それで、あいつは?」

「え?ガイはちゃんと魔導師隊が捕まえたから、もう大丈夫よ」

「そうじゃないよ!!佳奈だよ、佳奈!!」

最初は何を言われているのかわからないといった表情だったが、すぐに変わった。

「あゝ、あそこにいたエスパーの女の子??大丈夫。すぐに目が覚めたし、ちゃんと保護したわ。なあにゝ、気になるの?」

姉はより一層ふにやふにやした笑みを僕に向けてくる。

「そんなんじゃないよ!!」

慌てて立ち上がり否定する。

(あれ、昨日さんざんガイに切られたはずなのに、痛くない。それに傷もない!!)

体のあちこちを見てもどこにも傷はなかった。

「うふふ。傷はお姉ちゃんが治してあげたわ」

「……白姉。ありがとう……」

姉がゆつくりと立ち上がり、僕の頭に手を置いた。

「ホントに、よくがんばったね。ひーちゃん……」

僕の頭を優しくなでながら、姉は僕を抱きしめた。姉は優しくして、

暖かくて、シャンプーの香りがして、ふわふわしていて、気持ちよ
くて……

15 終わりのアノド

「起きろ ー!!」

声が聞こえる……。

窓から差し込む光と吹き付ける寒々しい風によって僕の安眠は奪われた。

布団がめくられているせいですごく寒い。

「眠い……」

そういつて、僕は再び布団を頭までかぶり、光と風を遮断した。

これでやっと静かに眠れる。

「早く起きないと!!」

「!!」

突然、僕の頭に生ぬるい水が降ってきた。

「うわっ!!」

僕の全身がずぶぬれになる。

「お前っ、冬に濡れると風邪ひくって言っただろ!!」

「でもお兄ちゃんが全然起きないんだもん。わたしは悪くないよ」

妹は腰に手を当てて「まったく」などといっている。

僕は一つため息をつく。

家の中とはいえ、冬に窓を開けずぶ濡れになっていたらさすがにすごく寒い。

「つくしゅん」

「風邪引くよ??早くシャワー浴びなよ」

木金が楽しそうに言う。

起こしてもらっておきながら怒る事はできないので仕方なく急いでシャワーを浴びる事にした。

寝坊するといつもこうなんだよなあ。

「お兄ちゃん。もう七時三十分だよ!!早く準備しないと学校遅刻するよ!!」

「な、何!?!」

時計を見る。確かに七時三十分を回ろうとしていた。

「白姉は??」

「お姉ちゃんならもうとっくに学校いったよ。それより早く準備してよ!! わたし先に行っちゃおうよ?」

今から急いで支度をしてもギリギリ間に合うか間に合わないかわからないだろう。

「うん、遅刻しても悪いし、じゃあ木金は先に行ってくれ」

僕は優しい笑顔で妹を送り出そうとした。

「……、バカ」

「えっ? 今何か言ったか??」

「ううん、何にも言っていないよ。それじゃあ先に行くね」
妹はそのままドタドタと家を出て行った。

(一瞬、木金にいらまれたような気がしたけど……、気のせいだよな。はあ……、俺も準備するか)

シャワーを浴び、制服に着替え、パンを口の中に押し込み、牛乳を流し込んで無理やり飲み込んだ。

(やべ、走っていかねえと間に合わねえな)

カバンを持ち、家の外へと飛び出す。

昨日までとは違い、外ではたっくさんの魔人が空を飛んでいる。

今では日常の光景だ。

「僕も空を飛べればなあ……」

そんなことを思っている時間はなく、急いで学校まで全力疾走を続けた。

(元に戻らない方が良かったんじゃないかな)

少し、後悔した。

「はあ、はあ、はあ、セーフ……」

なんとか、遅刻にはならなくてすんだ。

「何がセーフよ、だらしない。もつと余裕をもって登校しなさい！」

野中麻衣のなかまいが腰に手を当ててきつく睨んでいた。

まったく、俺の周りには気が強い女ばかりだ。

「あはは、ごめんなさい……」

「謝るなら次から早く来なさい。それに、ボタンも掛け違えてるし、シャツも出てるし……あゝもう、ちよつと止まりなさい！」
そう言った麻衣は少し恥ずかしそうに僕のボタンを留め始めた。

「いいよ、自分で留めるから」

「黙りなさい！これ、委員長としての役目なの。クラスが乱れないようにしなきゃいけないの！」

だんだん上のボタンを留めるにつれて麻衣の顔が近くなり、ボタンを留めるのに時間がかかっているようだった。

「つくしゅん！！」

大きなくしゃみをしたせいで、体が揺れ、麻衣の顔に身体が触れた。見る見るうちに、顔が真っ赤になっていく。

「わるいつ、つて、麻衣、顔が赤いよ？熱でもあるんじゃないのか？」

「きやつー！！」

麻衣のおでこに触り体温を確かめた。

（特に熱は無いみたいだなあ。うゝん、冬なのに暑いのかな？）

僕はじつと麻衣の顔をのぞき見る。麻衣はさっきよりも赤い顔で今にもプルプルと小刻みに震えていた。

「どうしたんだ？熱は無いみたいだけど……保健室行くか？」

「私の……ああ……」

麻衣は俯いたまま小さく何かを呟いていた。

「えっ？何か言ったか？」

「私にさわつ……さわあー！ー！！」

「！！」

麻衣の顔から火が出ていた。もちろん、比喻ではなく、本物の炎。

「あちつ、おまつ、なにすんだよ！！」

慌てて麻衣から距離をとる。

「あつ……。わ、私に触るから悪いのよ！！」

フンと横を向いて、逃げるように自分の席へ戻っていった。

女子達が麻衣に集まって「あつたか〜い」などといっている。

「つたく、なんなんだよ……」

「おい、みんな席に着け。日月、早く座れ」
たちもり

どうしていいかわからず、ぼーっと立っていると、先生が入って来た。

僕が小走りで自分の席にすわるの見計らって先生が続けた。

「今日は、みんなにいいお知らせがあるぞ〜。よし、入ってこい」

（いい知らせだつて？？今日は絶対悪い事しか起こる気がしねえよ）
そう思つて、興味なさげに窓の外を見ていた。

教室のドアが勝手にガラガラと開いた
わけではなく、ドア

の外に立っていた女の人がドアを開けた。

ちらりと視線だけをそちらに向ける。

すぐに僕はまるで石にでもなつてしまったかのように固まった。

するりと伸びた白くてきれいな足を動かして教壇の前に立つ。歩くときに黒くて長い髪がさらさらと揺れる。そして、僕をまっすぐに見る。

（な、なんで！？）

僕が驚いているのを見ていつものニヤニヤとした笑みを浮かべて、陽気な声で言った。

「初めまして〜、転校してきました！！宇佐美佳奈や〜。佳奈つてよんでえな〜。これからよろしく〜」
うさみかな

（なんで佳奈がこの学校にいるんだ？転校生！？）

僕が驚いた顔で佳奈の方を見ていると、佳奈から黒い何かが見えた。

(これは、まずい……)

「あつ！！ひすいっち〜。一緒のクラスやってんなあ。お〜い。えへへえ〜」

佳奈がたった今気づいたかのような顔で言った。ふと周りを見るとみんなが僕を見ている。顔を外に向け続け、無視を続ける。

(えへへえ〜じゃねえよ！！何でそういうこと言うんだよ。誤解されるだろうが！！)

心の中でそう思うと、佳奈は何かに気付いたようだった。まるで小さい子がいたずらをするときの顔で、こっ続けた。

「何で無視すんねん。恥ずかしがらんでええやんかあ〜。ウチらの仲やる」

(だからそういうことを言うなよ！！)

教室の中がざわざわと騒がしくなる。特に3人、尋常じゃない雰囲気の人がいる。野中からは火が噴き出していて、周りの人の制服を焦がしていた。学校の机や椅子が対魔法用に出来ていてよかつた〜、と考えている場合ではない。トモはガラガラとした目でこちらを見て、机の上にバキバキに折れた筆や鉛筆が並んでいた。一番ひどいのは、奏で、ものすごい形相でこちらを睨み、ぶつぶつと小さく何かを呟いていた。すると、奏の周りから黒いもやもやとしたものが生まれてくる。

(やばい……かなりキレてる……)

「僕と佳奈とは何にもないだろ！！」

何とかこの場をおさめようと大声を上げる。

「何にもないって、ひどいな〜。ウチら友達やん」

(……?)

教室中が「へ？」といったような、気の抜けた雰囲気になった。

「そうか〜、日月たちもりを知っているのか。じゃあ、日月たちもりの隣の席に座りなさい。そこ、一人ずつ右にずれなさい」

僕の席、窓側の一番後ろの隅の席の隣の人が立ち上がり、一つずつ右へずれる。

先生が新しい机と椅子を何も無い空間に出現させた。

佳奈がずんずんとこちらに歩いてくる。

「これからもよろしく、ひすいっち〜」

僕は深くため息をついて、机の上に倒れこむ。火が出ていたりはないものの、三人とも視線で人を殺せるような形相でこちらを見ている。

（なんで、麻衣まで怒ってるんだよ。別に悪いことなんかしてないのに……）

心がどん底まで落とされたような気分になった。

（これからコイツに振り回されそうな予感……というより、確実にそうなるだろうなあ）

最悪だ！！

「はあ〜」

ため息をつくたびに僕の幸せが逃げていつているような気がした。

「わからないことがあったらどんどん日月たちもりに聞くんぞ

（いや、先生、何言ってるの??）

僕は目を見開いて先生を見る。

先生は手をグツと握り、親指を突き上げてピカピカの笑顔で白い歯を見せている。

（全然よくないですよ!!）

僕が何か言う前に、佳奈が大きな声で答えた。

「了解で〜す!!」

（僕の意見は無視ですか〜!!）

すでに、僕にとって散々な毎日が始まっていた。

15 終わりアンド（後書き）

とりあえずの一章の話は後エピソードで終わりです。

二章からは本格的なSF???というか、魔法の要素が増えていく予定です。

見てくださった皆様、ありがとうございます。

どれくらいのペースで書けるかはわかりませんが、頑張ります。

第一章 エピローグ

後になってわかったことが二つあった。

一つは、佳奈の事だ。

もう命を狙われることもなくなり、動物に変えられていた両親も帰って来た。

それと、今までは、ずっと遠くに住んでいたらしい。

少し前に行った、佳奈が暮らしていた家は借家だったので、僕の家
の近くに引越すことになった。

それ以上の事を聞こうとすると、嫌な顔をするので聞けなかったけど、魔法に関する知識が豊富なところから、都会のレベルの高い学校に通っていたんじゃないかと思う。

記憶が戻った時、佳奈に教えられたような魂の話は知らなかったの
で、記憶が戻って初めてそのすごさに気付き驚いた。

いったい、どんな教育を受けていたのだろうか？

それはともかく、佳奈の生活が安定したものになったのでよかった
と思う。

もう一つは、ガイが捕まっていなかった、ということだ。

というより、捕まったガイは催眠術で操られていたただの一般人だ
つたのだ。

まあ、捕まろうがどうしようが僕には関係のない話。

どうせ、もう何もできないんだから。

同じ手が使えるほど魔導師隊は馬鹿ではない。

ガイも隠れてひっそりと生活するしかないだろう。

すぐに捕まるだろうけど。

それに、今回の事件で学問に対する世間の見方が変わったこともあ
って、もうガイも苦しまずに済むんじゃないかと思う。

魔力の弱い者にあれだけ大きな事件を起こされれば、政府も考え方

を変えざるを得なかった、ということらしい。

学校で学問を勉強をしなければならなくなったので、たくさんの生徒達がガイを恨んだのは言うまでもない。

まあ、僕としてはうれしい変化だったのは誰にも言えない。

それと、佳奈が転校してからの事だが、あの後本当に散々な目にあつた。

みんなからどういふ仲なんだと、質問攻めにあい、何でも無いといつたら今度は佳奈が怒り出して作り話を始めるし。

本当に最悪の一日だった！！

いや、進行形だ。最悪の日々が始まっている！！

最悪だけど、僕が望んでいた、平和な日々だ。

第一章 エピローグ（後書き）

第一章、完結です！！

いま読み返してみたのですが、文章力のなさや発想やボキャブラリーの貧困さに悲しくなりました。

もっと、勉強します。

二章からも頑張りますので、よろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2897n/>

ニヤ～ゴ ～ Dreamlike stories ～

2011年10月7日18時01分発行